

(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第13集

広島市東区牛田早稲田所在

牛田早稲田遺跡 発掘調査報告

1994・2

財団 法人 広島市歴史科学教育事業団

は し が き

広島デルタの北東に位置する東区は、早くから人々が生活を営んだ痕跡が見られる地域で、市内では数少ない縄文時代の遺跡や弥生時代の遺跡が点在しています。

今回報告いたします牛田早稲田遺跡は、市立牛田第二中学校（仮称）の建設に伴って消滅することとなり、発掘調査を実施したものです。

調査の結果、竪穴式住居跡、貯蔵穴等が確認され、弥生時代後期の集落跡であることが分かりました。また、土器、石器、鉄器などの遺物を検出し、この地域の古代の人々の生活を知るうえで、貴重な資料を得ることができました。

この報告書によって、地域の歴史学習や、郷土に対する理解と愛着を深めていただければ幸いです。

最後に、調査にあたり、御指導・御助言を賜りました諸先生方、ならびに御協力をいただきました多くの方々、炎天下の中発掘に従事して下さった方々に厚く御礼を申し上げます。

平成6年2月

財団法人 広島市歴史科学教育事業団

例 言

1. 本書は、広島市東区牛田早稲田四丁目、牛田東四丁目における市立牛田第二中学校（仮称）建設事業用地造成にともない、平成5年5月24日から10月1日までの間実施した牛田早稲田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島市土地開発公社より委託を受けて、財団法人広島市歴史科学教育事業団が実施した。
3. 本書は、若島一則、篠原達也が執筆し、若島が編集した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は、若島、篠原が行った。
5. 遺物の実測は、若島、篠原が行った。
6. 遺物の写真撮影は、若島が行った。
7. 図面のトレースは、若島が行った。
8. 本書掲載の航空写真撮影は、スタジオ・ユニに委託した。
9. 第1図に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1の地形図を複製したものである。
10. 遺構配置図内に表示した基準杭の座標データは、以下のとおりである。

	X座標	Y座標
基1	－175,838.5855	29,575.54
基2	－175,900.3106	29,523.68
基3	－175,887.2331	29,588.13

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	3
III 遺構と遺物	6
1 調査の概要	6
2 遺構	6
3 遺物	9
IV まとめ	17

挿図・表目次

第1図	牛田早稲田遺跡周辺遺跡分布図	2	第8図	掘り込み状遺構実測図	25
第2図	牛田早稲田遺跡遺構配置図	21	第9図	牛田早稲田遺跡 出土土器実測図（1）	26
第3図	第1号住居跡実測図	22	第10図	牛田早稲田遺跡 出土土器実測図（2）	27
第4図	第2号住居跡及び 第3号土壇実測図	23	第11図	牛田早稲田遺跡 出土土器実測図（3）	28
第5図	第1号・第2号土壇実測図	24	第12図	牛田早稲田遺跡出土遺物実測図	29
第6図	住居跡状遺構実測図	25	第1表	牛田早稲田遺跡出土土器観察表	12
第7図	第4号土壇実測図	25			

図版目次

図版 1	牛田早稲田遺跡遠景（南西から）	図版 6a	第1号・第2号土壇近景（東から）
図版 2a	牛田早稲田遺跡全景（調査前）	b	第1号土壇土器出土状況
b	牛田早稲田遺跡全景（調査後）	図版 7a	第2号土壇
図版 3a	第1号住居跡	b	第3号土壇
b	第1号住居跡土器出土状況	図版 8a	第4号土壇
図版 4a	第2号住居跡及び第3号土壇	b	掘り込み状遺構遺物出土状況
b	第2号住居跡炭化材出土状況	図版 9	牛田早稲田遺跡出土遺物（1）
図版 5a	牛田早稲田遺跡近景（南から）	図版 10	牛田早稲田遺跡出土遺物（2）
b	住居跡状遺構	図版 11	牛田早稲田遺跡出土遺物（3）

I は じ め に

1985年（昭和60年）8月、広島市教育委員会社会教育部管理課は、広島市東区牛田早稲田四丁目、牛田東四丁目における市立牛田第二中学校（仮称）建設計画にあたり、計画区域内の埋蔵文化財の分布調査を行った結果、弥生時代の土器片及び土壙を検出、遺跡の存在を確認した。その後、教育委員会社会教育部管理課と同施設部用地課、造成主である広島市土地開発公社は、遺跡の取扱いについて再三協議を重ねたが、現状保存は困難であり、記録保存によることも止むを得ないとの結論に達した。

1993年（平成5年）広島市土地開発公社は、財団法人広島市歴史科学教育事業団に調査を委託して行うこととした。これを受け、事業団は同年4月から発掘調査の準備にかかり、5月24日に調査を開始し、10月1日に終了した。

調査の関係者は次のとおりである。

調査委託者 広島市土地開発公社

調査主体 財団法人広島市歴史科学教育事業団

調査担当課 財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課

調査関係者 松原 明二 常務理事

山出 健志 文化財課長

幸田 淳 文化財課事業係長

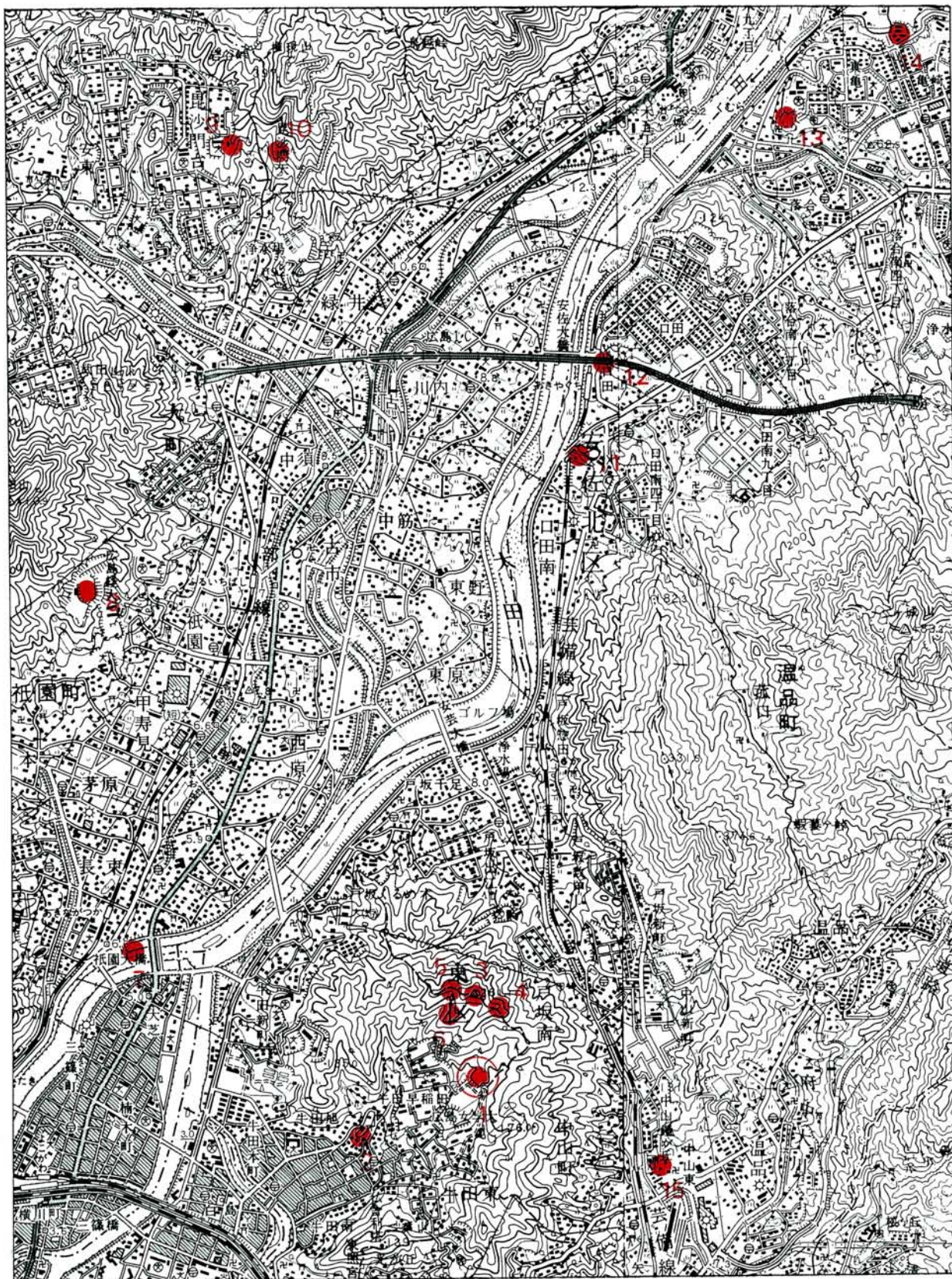
調査者 君島 一則 文化財課主査（調査担当者）

篠原 達也 文化財課学芸員（調査担当者）

調査補助員（五十音順、敬称略）

阿武 盟子、石原 光江、井手 文子、乾 操子、植木 真澄、大田マツノ、岡本 利也、小 野圭、柿田美也子、片島三察子、鎌田ナオミ、河合 淳子、河合 俊篤、川本 陽子、神田 剛、児玉 淳子、佐伯ひとみ、坂井 文子、佐藤 信子、重本 君子、管原 彰子、住川 加代子、住川 義治、高木 素子、高本すがこ、宅見 陽子、田中 範昭、坪木 征子、戸井 逸子、戸津川隆子、橋本 礼子、演田由倭子、松浦 雅夫、宮田 政子、宗近 幸子、村田 友子、室積 卓、森田美恵子、矢島とみえ、山崎 瞳、山田 逸二、山中早茅子、横光 美皇、吉村 和子、若林 千晶

広島市土地開発公社、広島市教育委員会、牛田公民館、学校法人広島女学院、地元在住の西坂悟氏ほか多くの方々には、調査を円滑に進めるため、多大な御配慮と御協力をいただいた。また、調査中、潮見浩広島大学名誉教授、広島大学文学部考古学教室川越哲志教授、同河瀬正利助教授、同古瀬清秀助手から貴重な御指導、御助言をいただいた。さらに、報告書作成にあたっては、早稲田神社宮司池田久雄氏他多くの方々から広範な御教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。



1. 牛田早稲田遺跡 2. 牛田早稲田神社遺跡 3. 西山 261 m 貝塚 4. 西山 210 m 貝塚 5. 西山 258 m 貝塚 6. 茶磨山南貝塚 7. 太田川放水路固定堰遺跡 8. 広島経済大学構内遺跡群 9. 毘沙門台遺跡 10. 毘沙門台東遺跡 11. 弘住遺跡 12. 大明地遺跡 13. 恵下山遺跡群 14. 狐ヶ城遺跡 15. 中山貝塚

第1図 牛田早稲田遺跡周辺遺跡分布図 (S=1:50,000)

II 位置と環境

牛田早稲田遺跡は、広島市東区牛田早稲田四丁目・牛田東四丁目に所在する。

牛田早稲田・牛田東地区は、標高261mの西山（茶磨山、茶臼山、牛田山、城山などとも言う）とそれに連なる標高170m前後の小山峰に取り囲まれている。西山では、小山峰をつなぐ山稜線を境に、北側に延びる尾根は急であるが、南側へ延びる尾根は比較的緩やかである。本遺跡は西山から南側へ延びる緩やかな尾根上の標高108mから122mの地点に位置する。

牛田早稲田地区は早くから宅地造成等の開発の進んだ地域で、本遺跡の位置する尾根の南側もすでに開発され旧来の地形が失われている。昭和22年の航空写真によると、谷地形が平野部から深く北東方向へ入り込んでおり、本遺跡の西側に残存する谷地形については、先述した谷の最奥部にあたる。この谷の旧水田面から本遺跡までの比高は約27mで、谷頭には湧水が認められた。

次に、本遺跡周辺の弥生時代の遺跡について概観すれば以下の通りとなる。

まず最初に登場する遺跡としては中山貝塚（1）及び山根遺跡（2）があげられる。中山貝塚は、縄文時代晩期から弥生時代中期中葉にわたり標高10m以下の丘陵先端部に形成された遺跡であり、5層の貝層から石器他の道具類と共に多量の土器を出土している。弥生時代前期の土器を中心とする遺跡であるが、中期中葉の時期まで継続的に土器が確認されており、それ以後の時期については不明確となる。貝塚を形成した集落跡については確認されていないため、当時の集落の実態については明確になっていない。山根遺跡については弥生時代前期の土器の出土が伝えられるが、単独の出土であり概要については明確にしない。

次に、弥生時代中期の遺跡であるが、丘陵上を中心にいくつかの遺跡が確認されている。弘住遺跡（3）は、古墳時代を中心とした縄文時代後期から古墳時代後期までの遺跡であるが、弥生時代中期後葉の土器が比較的多量に出土している。遺構としては配石遺構が確認されているが、その性格については明確にされていない。狐ヶ城遺跡（4）は小児用土器棺墓1基から構成される遺跡であるが、使用されている土器から弥生時代中期後葉の時期のものと考えられる。牛田早稲田神社遺跡（5）は、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての遺跡であるが、貝層下の円筒形の土壇から人骨が出土し、土壇墓と考えられている。土器は土壇上面の貝層から出土しており、中期後葉から終末の頃に位置づけられるいわゆる塩町式にあたるものである。牛田早稲田神社遺跡は、地理的に谷一つを隔てた西側に隣接しており、時期も本遺跡に連続する時期のものであるため、注目される。この他、中期の土器を出土した遺跡としては、太田川放水路固定堰遺跡（6）がある。太田川流路中の砂層からの出土で弥生時代中期から後期の土器を中心に弥生土器数点の出土が伝えられている。以上のように、上述した遺跡は、！太田川河口乃至はその沖積地を直接眼下に見下ろす地点に立地している、”土器の出土点数も少なく、極めて単発的である、という点に共通点があるようである。一方、内陸部に目を転ずれば、中期後葉の土器を伴い、石棺10基等を出土した佐久良遺跡（7）や中期後半を中心に中期から後期にかけて数十基におよぶ石棺が造られたと推測されている丸子山遺跡（8）など、かなり大規模な遺跡が発見されており、沿岸部との相違を際立たせている。

次に、弥生時代後期になると広島湾沿岸部の丘陵上に集落が次々と営まれるようにな

る。現時点で、丘陵上から発見される集落跡については、すべてこの時期に属していると言っても過言ではなかろう。太田川下流域におけるこの時期の代表的な集落跡をあげれば、太田川東岸に位置する恵下山遺跡群（9）、大明地遺跡（10）、太田川西岸に位置する毘沙門台遺跡、毘沙門台東遺跡（11）、広島経済大学構内遺跡群等（12）があげられる。恵下山遺跡群は、弥生時代後期の集落跡の外、古墳3基、中世山城1か所からなる複合遺跡である。集落跡は、6か所13軒から構成されており、上深川Ⅰ式からⅢ式（13）までの時期とされている。大明地遺跡は、集落跡及び古墳2基等から構成される複合遺跡で、集落跡は竪穴式住居跡16軒、掘立柱建物跡25棟等から構成されている。集落跡の時期は上深川Ⅰ式からⅢ式までと考えられ、一部に中期中葉頃の建物跡及び土器若干を含むようである。毘沙門台遺跡については、住居跡70軒、土壇180基等、太田川下流域最大の集落跡と伝えられるが未報告であるため概要は明確にしない。また、谷を隔てた東側に近接する毘沙門台東遺跡は、半ばを耕作等により削平されているとは言え、住居跡49軒、土壇111基を数える規模を有し、上深川Ⅰ式からⅢ式までの時期に営まれた集落跡とされている。なお、出土遺物を見ると、一部中期的様相をもつ土器が含まれており注目される。次に、広島経済大学構内遺跡群であるが、古墳や中世の建物跡等も含み、3つの遺跡から構成される複合遺跡で、集落跡については住居跡18軒からなり、上深川Ⅰ式からⅢ式までの時期に営まれたものと考えられる。出土遺物の中に僅かではあるが中期終末の時期と考えられる土器を含んでおり、集落跡の上限がその時期にまでさかのぼる可能性を有する遺跡である。以上のように、太田川下流域の比較的大規模な集落跡については、いずれも上深川Ⅰ式でも比較的最早い時期に上限を求めうると考えられ、一部には中期終末にまでさかのぼる可能性を有するものも有るようである。

一方、本遺跡の周辺に目をやれば、西山山頂付近から本遺跡も含まれる南側丘陵にかけて貝塚群の存在が確認されている。西山261m貝塚（14）は山頂部に位置するが、詳細は明らかではない。西山258m貝塚（15）は、西山頂上から西へ延びる稜線に位置する遺跡である。1964年に巴型銅器が採集されたことを契機に、翌65年広島大学考古学研究室が発掘調査を行い、弥生時代後期終末の土器や銅鏃・鉄鏃・骨鏃・鉞・鉄斧・石斧・石錘・丁字頭土製勾玉・分銅型土製品が出土した。その後1972年の調査の際には、竪穴式住居1軒が検出された。

西山210m貝塚（16）は、西山山頂から南東に下った稜線上に位置し、上深川Ⅱ式に属する土器が出土している。

茶磨山南貝塚（17）は、西山から延びる尾根上標高220m付近に位置する。弥生時代後期のものと考えられるが、遺跡の規模・時期などについての詳細は明らかではない。

これら西山山頂付近に点在する貝塚群は、いずれも弥生時代後期に属しており、！かなりの高地に立地すること、” 付近に生産基盤となる可耕地がないこと、＃一部の遺跡から巴型銅器などの特殊な遺物、多数の鏃類が出土したこと等から、「古墳時代直前の国家統一の過程における軍事的あるいは防塞的性格を持った遺跡」（18）という評価もあり、早くから「高地性集落」として注目されている。

このほか、工事中の発見のため、詳細は明確ではないが、上深川Ⅲ式に属する土器の出土が伝えられる遺跡として浅野山遺跡（19）がある。

以上のように、本遺跡の所在する牛田地区は、西山貝塚群等の存在のために注目され

てきた地域ではあるが、早くから宅地造成が行われてきたために遺跡の実態の把握が困難な状態であり、その意味で今回の発掘調査は貴重な機会と言えよう。

注

- (1) 広島市教育委員会『新修広島市史』第1巻総説編 1961
- (2) 禅昌寺西遺跡発掘調査団『禅昌寺西遺跡発掘調査報告』1980
- (3) 広島市教育委員会『弘住遺跡発掘調査報告』1983
- (4) 広島県教育委員会「狐ヶ城遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977
- (5) 注(1)に同じ
- (6) 広島県教育委員会『広島県史』考古編 1979
- (7) 広島市教育委員会『佐久良遺跡発掘調査報告』1984
- (8) 石田彰紀「中山のあけぼの」『中山村史』広島市 1991
- (9) 広島県教育委員会「恵下山遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977
- (10) (財)広島県埋蔵文化財調査センター「大明地遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』1987
- (11) 広島市教育委員会『毘沙門台東遺跡群発掘調査報告』1990
- (12) 広島市教育委員会『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』1984
- (13) 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線(石内バイパス)道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988広島市教育委員会『岩上山田遺跡発掘調査報告』1988なお、時代的位置付けについては、上深川Ⅰ式を弥生時代後期前葉に、上深川Ⅱ式を弥生時代後期中葉～後葉に、上深川Ⅲ式(古)を弥生時代後期終末から古墳時代初頭、上深川Ⅲ式(新)を古墳時代前期として整理し、以下すべてこれに準じた。
- (14) 広島市教育委員会『広島市遺跡分布地図』(広島市の文化財第47集) 1990
- (15) 注(6)に同じ
- (16) 注(1)に同じ
- (17) 注(14)に同じ
- (18) 注(8)に同じ
- (19) 注(1)に同じ

III 遺構と遺物

1. 調査の概要

牛田早稲田遺跡は、標高261mの西山から延びる尾根上に位置する。この尾根は、南側に延びており、標高122m付近の平坦な部分で尾根が分岐し、南西方向に支尾根が延びる。調査は、南方向に延びる尾根上と、南西方向に延びる支尾根上に32の調査区を設定して行った。

調査の結果、竪穴式住居跡2軒、住居跡状遺構1か所、土壇4基、掘り込み状遺構1か所を確認した。遺物は、遺構内およびその周辺から、弥生土器、石器、鉄器、炭化種子等が出土した。

2. 遺構

(1) 住居跡

第1号住居跡（第3図）

第1号住居跡は南にのびる尾根の稜線を西に大きく外れた斜面に位置する。本住居跡は、斜面を幅5.9m、奥行4m、高さ1.9mほどの規模で掘り込み、その中に造られている。

残存する床面の規模は、最大で、南北約4.9m、東西約2.4mで、西側は斜面のために流失しているものと考えられる。住居跡北側には、壁に沿って床面が高くなっている部分がある。この高床部分の床面との比高差は19cm程で、幅は東壁面辺りで最大となり70cm、東壁から西に80cmの地点辺りで消失している。壁は、東側及び北側については前述した掘り込みに沿って残存しており、南側は掘り込み途中で消失する。壁高は最高31cmである。壁溝は、床面の東及び南側は壁に沿って周回するが、北側の高床部分直下の部分からは確認しえなかった。ただ、高床部分の東及び北側の壁面直下からは、あたかも床面東側の壁溝に続くような形で壁溝の存在を確認している。なお、東側壁の中間部についても長さ約30cm程度壁溝の途切れる部分がある。壁溝の幅は8～13cmで、深さは1～4cmである。

柱穴は床面より、2個検出した。P1は径35cm、深さ64cm、底面レベル115.2m、P2は径29cm、深さ56cm、底面レベル115.2m、P1・P2の柱間距離は355cmである。柱穴の形状・規模及び壁面との位置関係からP1、P2は主柱穴と考えられる。

P1、P2の中間付近の床面からは、南北67cm、東西39cm、深さ7cmの規模で不整形な掘り込みが確認された。この掘り込み内には、さらに深さ6cm及び10cmの円形の掘り込みが掘られている。内部からは炭化物が確認され、本住居跡に伴う炉跡と考えられる。本住居跡の上屋構造については、主柱穴と考えられる2個の柱穴と東側壁面との距離が140cmと広いこと、4本柱構造の住居を想定した場合にかなり大幅に斜面側に張り出すこと、及び炉跡との位置関係等から、2本柱構造と推定される。その場合、残存部から推定される平面プランは南北方向に長い隅丸長方形で、長辺5m、短辺3m前後の住居跡であったと考えられる。高床部については、他の住居跡との重複の痕跡と考えることもできるが、床面と高床部分との間にある段を壁とすると、壁溝が北端で西側に回ることなく途切れていること、P1と段部分との距離がP2と南側壁面に比べて短くなり過ぎること、東側壁面が段部分で途切れることなく直線的に延びていること等と矛盾する点が多く、床面と高床部分の段が本住居跡の壁となる可能性は極めて低いと考えられる。その場合、高床部分は北側壁面に沿って住居跡西壁まで延びていた可能性が考えられる。

遺物は、床面より完形の鉢（No.1）が出土している他、埋土中より多数の土器片が出土した。また、34cm×40cmの平坦な面を水平にした石1点が出土している。時期は、床面出土の鉢及び埋土中の土器等から上深川Ⅱ式に属するものと考えられる。

なお、炉跡から南へ20cmの位置、34cm上から、長径50cm、短径36cmの規模で炭化物の集積が確認された。住居跡掘り下げ時に、これとほぼ同レベルで堅く締まった面を部分的に確認しており、建て替え等のあった可能性も考えられる。ただ、残存する壁面及び床面等に建て替えをうかがわせる痕跡を確認しえなかったため、明言しえない。

第2号住居跡（第4図）

第2号住居跡は、南西方向に延びる尾根の鞍部に位置する。本住居跡の南側1/5は斜面のため流失している。平面プランは円形で、北西部に床面より一段高い方形の突出部を伴う。掘り方内には赤変した焼土が充満し、炭化材も検出されたため、焼失住居と考えられる。

残存する床面の規模は、南北5.46m、東西5.47mである。壁は、南東部分を除いて遺存し、壁高は最高所の北側で49cmである。壁溝は、幅9～16cm、深さは2～13cmで、遺存する壁に沿って周回するが、壁最高所付近において長さ70cmにわたり2条に分かれ、南側の1条は床面に大きく湾曲して入り込んでいる。また、北西突出部の規模は、長辺175cm、短辺75cmで、壁高は最高25cmである。壁溝は北西角から南側にかけて壁に沿って遺存し、幅は9～16cm、深さは2～6cmである。突出部平坦面と床面との比高は24cmである。

床面からは26個のピットを検出した。そのうち本住居跡の主柱穴と考えられるものは、P1～P5の5個のピットである。柱穴の規模は、P1が長径32cm×短径26cm、深さ22cm、P2が直径30cm、深さ53cm、P3が長径32cm×短径27cm、深さ47cm、P4が直径34cm、深さ40cm、P5が直径40cm、深さ50cmで、底面レベルは113.6～113.7mである。柱間距離は160cm前後で一定しており、流失した床面南東部に等距離で柱穴を復元すると他に2本の主柱穴の存在が予想されるため、本住居跡は7本柱構造の住居であったと考えられる。なお、床面中央付近に位置するP7・8は、主柱穴に比して規模が小さく、位置関係から支柱穴と考えられる。また、小規模なピット多数が検出されているが、壁溝内から検出された小ピットのいくつかについては平面プランの変換点に対応する様に位置するものもあり、内部から炭化材を検出したものもあるため、垂木材を固定するなど何らかの上屋構造物に関する施設の痕跡とも考えられる。床面中央よりやや北側からは、南北71cm、東西73cm、深さ2～15cmの掘り込みが確認された。位置関係から炉跡と考えられる。現状では、長方形の掘り込みに浅い三角形の掘り込みが付属した様な形状をしており、それぞれの床面は比較的平坦であったことから、2つの長方形の掘り込みが重複している可能性も考えられよう。2つの掘り込みの比高は7cmである。

遺物は、遺構内焼土中（No.11）及び埋土中（No.12, 13）より土器片が出土した。これらの土器は、形態から上深川Ⅰ式に属するもののみに限られており、本住居跡も上深川Ⅰ式の時期の遺構と考えられる。

なお、本住居跡の突出部の性格を考えると、突出部が尾根上の比較的平坦な面に向けられて造られていること、主柱穴P2, P3間を意識して造られていることから、入口等の

施設としても想定可能であるが、幅が170cmと広く、外側にピット等の施設も確認できなかったため、明言は避けておきたい。

(2) 住居跡状遺構（第6図）

住居跡状遺構は、南東にのびる尾根の稜線を西に外れた斜面に位置する。

残存する床面は、幅408cm、奥行205cmである。床面南側は斜面のため流失していると考えられる。壁高は最高所の中央部で53cmである。床面からは2個のピットを確認した。P1は、長径28cm×短径23cm、深さ45cm、底面レベル118.49m、P2は長径28cm×短径25cm、深さ30cm、底面レベル118.55mである。

本遺構からは、床面と考えられる平坦面及び柱穴と考えられるピット2個を確認したが、壁溝が確認されなかったこと、壁が不明瞭であること等から住居跡状遺構とした。

遺物は、埋土中から土器（No.22）をはじめとして上深川Ⅰ式に属するもののみが出土しており、上深川Ⅰ式の時期に属する遺構と考えられる。

(3) 土壙

第1号土壙（第5図）

第1号土壙は、南に延びる尾根上、本遺跡最高所付近の平坦面に位置する。平面プランは隅丸長方形、断面形は逆台形、底面は水平である。規模は、上縁部で長辺110cm、短辺86cm、底面で長辺85cm、短辺64cm、深さは最深部で55cmである。

遺物は、底面より約30cm浮いた位置から水平に寝かされた状態で完形の甕（No.14）1点が出土した。また、前述した甕と同レベルから土器2点（No.15, 16）も出土しており、これらの形態から上深川Ⅰ式に属する遺構と考えられる。

本土壙は、形状から貯蔵穴と考えられる。

第2号土壙（第5図）

第2号土壙は、南東に延びる尾根上、本遺跡最高所付近の平坦面、第1号土壙の北側1.1mに位置する。平面プランは隅丸方形、断面形は逆台形で、底面は水平である。規模は、上縁部で南北142cm、東西143cm、底面で南北126cm、東西120cm、深さは最深部で62cmである。

遺物は、埋土中から土器片（No.17, 18）が出土した。これらの土器は、いずれも形態から上深川Ⅰ式に属するものと考えられ、本土壙は上深川Ⅰ式の時期の遺構と考えられる。

本土壙は、形状から貯蔵穴と考えられる。

第3号土壙（第4図）

第3号土壙は、南西に延びる尾根の鞍部、第2号住居跡の東側1.2mに位置する。平面プランは隅丸長方形、断面形は逆台形、底面はほぼ水平である。規模は、上縁部で長辺153cm、短辺107cm、底面で長辺137cm、短辺101cm、深さは最深部で61cmである。また、底面からは、直径33cm、深さ16cmの円形の掘り込みが確認されたが、性格については明らかではない。本土壙は、雨天時の流路に位置しているために雨水による浸食を受け、遺存状態は悪かった。

遺物は、土壙内の底面に近い位置から炭化材、焼土に混じる形で高坏（No.19, 20）などが出土した。これらの土器は、形態から上深川Ⅰ式に属するものと考えられ、本土壙は上深川Ⅰ式の時期の遺構と考えられる。

本土壙は形状から貯蔵穴と考えられるが、内部からは炭化材、焼土が出土しており、時的にも第2号住居跡とほぼ同時期と考えられ、位置も近接していることから、第2号住居跡に伴う可能性が高い。その場合、第2号住居跡焼失時には本土壙を使用していたものと考えられよう。

第4号土壙（第7図）

第4号土壙は、南西に延びる尾根の稜線を北にはずれた斜面に位置する。底面プランは長円形で、底面で長径182cm、短径172cmを測り、底面はほぼ水平である。断面形はやや袋状を呈し、深さは最深部で150cmである。

遺物は、埋土中から土器片が出土したが、細片のため時期は明らかではない。

本土壙は形状から貯蔵穴と考えられる。

（4）掘り込み状遺構（第8図）

掘り込み状遺構は、南東にのびる尾根の鞍部、第2号住居跡に隣接して確認された。残存する規模は、幅237cm、奥行最大で127cm、壁高は最高25cm、壁溝は、幅9～13cm、深さ5～10cmである。立地の関係で、北側で底面・壁・壁溝とも流失しているものと考えられる。

遺物は、土器、石錘、炭化種子が出土した。土器は底面付近及び壁溝埋土中から石錘とも混じりあう様な状態で出土したが、細片のため時期は不明である。石錘（No.31）は、壁溝の底から10cm浮いた位置に、南壁に沿うような状態で出土した。炭化種子は埋土中及び平坦面付近から出土した。炭化種子は、科学分析の結果コナラ属の種子であることが判明した。

なお、本遺構の性格は明らかではないが、近接する第2号住居跡北西突出部との形態的な類似性を指摘しえよう。ただ、高さ、形状、壁溝のある点等は類似しているが、明らかに規模が1.5倍程度大きく、また北側には住居跡の痕跡は全くみとめられなかったことから、第2号住居跡北西突出部と同様の施設となる可能性は極めて低いと考えられる。内部から炭化種子が出土していることを勘案すれば、あるいは貯蔵穴の残欠である可能性もあろう。その場合は、時的に第2号住居跡に先行する遺構であることとなるが、明言はしがたい。

3. 遺物

本遺跡からは、弥生土器、石器等の他、安山岩製と考えられる石核1、剥片数点や鉄片数点等が出土している。

（1）弥生土器（第9図1～第12図30）

本遺跡より出土した弥生土器は、口縁端部の形状から大まかに2時期に別れるものと考えられる。

すなわち、第1号住居跡内及びその周辺のみから出土した口縁部屈曲点あたりと口縁端

部の厚みをほぼ同じくする一群の土器と、遺跡調査区内全域から出土する口縁端部を肥厚させる比較的古い様相を示す一群の土器である。前者の土器は数量及び分布範囲共に限られたものであり、後者の土器が圧倒的多数を占めていると考えられるが、後者については破損、磨耗等が著しく、残存状態の良好な資料が少なかった。

前述した2時期の土器のうち、前者は、口縁部を強く外湾気味に立ち上がらせ、端部を平たく或いは丸く仕上げるという特徴を有している。ほぼ完形に近い(No.2)について見てみると、胴部最大径の位置も比較的低く丸胴化の傾向を強く示しており、文様も付けられていない。他の土器についても、肩部以上の破片がほとんどを占めているため明言しがたいが、ほぼ同様の特徴を有していると考えられよう。このような特徴は、上深川Ⅱ式でも比較的新しい時期のものであり、特に通常肩部から頸部にかけて施されている文様が全く見られなかった点は上深川Ⅲ式に通じる特徴として注目される。また、口縁部は器厚を減じつつ外反させ、端部を薄く尖らせるという上深川Ⅲ式古段階の特徴を示す(No.8)も第1号住居跡北側土器溜まりから出土しており、第1号住居跡埋土中出土の(No.6, 7)の高杯についても比較的新しい時期に属するものと考えられる。以上のように、これらの一群の土器は、全般的に極めて似通った特徴を示しており、上深川Ⅱ式終末から上深川Ⅲ式初頭にかけての比較的短い期間に使用し廃棄されたものと考えられる。

次に後者の土器については、口縁部を「く」の字状に外反させ、端部を肥厚させるという特徴を示し、口縁端部に断面「U」字形の凹線文を施すものとそれが明確でないものがある。内面のヘラ削り及び外面の施文帯等の位置については、胴部中位にあるもの(No.12, 16, 22)、中位から肩部の中間あたりにあるもの(No.14, 24)、肩部あたりにあるもの(No.11, 25)と様々である。底部についてみれば、しっかりとした平底乃至くぼみ底を成し、そこからゆるく外湾しながら立ち上がっており、内面についてはほとんどの土器がナデで仕上げられている。これらは全般的には上深川Ⅰ式土器の特徴を示していると考えられるが、口縁端部以外にも凹線文を多用するもの(No.16, 19, 27)を始め、胴部外面の文様帯や内面のヘラ削りの位置が低いもの等、比較的中期的様相を残す土器が多くふくまれていると考えられる。また、(No.23)については、口縁端部の肥厚はそれ程目立たないが、口縁部は屈曲点あたりから水平に近い角度で強く外方にのび、胴部はゆるく脹らみながら直線的に下方に続くという中期終末頃の甕形土器の特徴を示している。以上のように、後者の土器群については、中期終末の土器の特徴を色濃く示す土器を一部含んでおり、さらに、大半が中期終末と上深川Ⅰ式土器との中間的な特徴を示すもので占められていることから、上深川様式土器における編年的位置づけの点で注目される。

(2) 石錘(第12図31)

第2号住居跡西側に位置する方形の掘り込みから出土したもので、掘り込みの壁に沿って巡らされた溝の中から、壁に沿うように横長の側面を上に向け、弥生土器の小破片に混ざる形で出土した。長径130mm、短径90mm、厚さ29mmを測る長円形の円礫の長軸側の両端を打ち欠いて石錘としている。他の例から漁獵具として使用されたものと考えられるが、単独の出土であり、用途については即断は避けたい。石材は石英閃緑岩である。

(3) 砥石（第12図32）

第1号住居跡北西側から出土したものである。残存長74mm，最大幅35mm，最大厚39mmを測る。使用面は長辺側4面の内の3面にあり，その内1面についてはほぼ半分だけが使用されている。使用面には3面とも同じ側に偏って著しくくぼんでいる箇所があり，くぼみの偏っている側が折損している可能性が高い。また，使用痕と考えられる長辺の方向に平行する条痕もそのくぼんだ箇所を中心にして観察できる。

(4) 石鏃（第12図33・34）

本遺跡からは，打製石鏃2点が出土した。

（No.33）は，第2号住居跡埋土中，焼土層上面から出土したものである。全長21mm，最大幅は基部にあつて16mm，厚さ3mmを測る。形状はやや不整形な二等辺三角形を呈しており，基部は直線状に作られている。石材は安山岩である。

（No.34）は，第1号・第2号土壌の位置する本遺跡中最高所平坦面の南側斜面から出土したもので，全長19mm，最大幅13mm，厚さ4mmを測る。側縁は基部に向けて緩く外湾しており，基部の中央部が「U」字形に湾曲している。本来，深いえぐりを持っていたものと考えられるが，現状では製作時か使用時かに基部の片側を欠失している。石材は安山岩であり，片側は自然面をそのまま使用している。

第1表 牛田早稲田遺跡出土土器観察表

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形について	成形・調整について	備考
1	第1号住居跡	碗	口径10.0 底径4.8 器高5.7	口縁部は強くつまむことにより明瞭な段を形成し、その部分から器厚を減じながら端部は丸くおさめている。底部は、ややくぼみ底である。	内外面とも口縁部ヨコナデ、以下ナデ	色調:淡黄褐色 胎土:やや密 焼成:やや長
2	第1号住居跡埋土中	壺形土器	口径12.8 胴部最大径28.2	口縁部は緩く外湾しながら上方に立ち上がり、端部は断面の丸い棒状の工具で強く押さえられている。胴部最大径を比較的低い位置に持ち、丸胴化の傾向を示す。	口縁部はヨコナデ、胴部は内外面共にナデで、胴部最大径以上に指頭痕を残す。口縁部屈曲点直下に粘土貼り付け痕を明瞭に残している。	色調:淡黄褐色 胎土:やや粗 焼成:やや良
3	第1号住居跡埋土中	甕形土器	口径21.1	口縁部は緩く外湾しながら上方に立ち上がり、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部はヨコナデ、以下荒いハケメ 内面 口縁部は貝殻腹縁等によるハケメ 屈曲点直下はヘラ削り後ナデ、以下ヘラ削り	色調:淡赤褐色 胎土:やや密(石英大粒含) 焼成:良好堅緻
4	第1号住居跡埋土中	甕形土器	口径14.3	口縁部は強く外湾しながら外上方に開く、端部は平たくおさめている。	口縁部は内外面ともにヨコナデ、屈曲点付近内面にシボリ痕あり	色調:淡褐色 胎土:やや粗 焼成:やや良
5	第1号住居跡埋土中	甕形土器	口径9.4	口縁部は緩く外湾しながら上方に立ち上がり、端部は丸くおさめている。	口縁部は内外面ともにヨコナデ、以下外面はナデ、内面はヘラ削り	色調:暗褐色 胎土:やや密(石英大粒若干含) 焼成:やや良
6	第1号住居跡埋土中	高坏	口径12.0	口縁部は僅かに外湾気味に外上方にのび、端部は丸くおさめる。	外面 不明 内面 口縁部はヨコナデ、以下ナデ	色調:淡黄色 胎土:やや密(石英大粒僅かに含) 焼成:やや良軟質
7	第1号住居跡埋土中	高坏	脚端部径13.4	裾部は「ハ」の字状に直線的に開き、端部は器厚を減じつつ丸くおさめている。	内外面ともにナデ 脚部の2方向に円形のスカシ	色調:淡黄色 胎土:やや密(石英大粒僅かに含) 焼成:やや良軟質
8	第1号住居跡北側土器溜まり	甕形土器	口径14.1	口縁部は僅かに外湾気味に外上方にのび、端部は器厚を減じつつ尖らせている。	外面口縁部はヨコナデ、以下ナデ 内面口縁部はヨコナデ、以下ヘラ削り 口縁部屈曲点外面に明瞭な粘土貼り付け痕有り	色調:黄褐色 胎土:やや密(長石大粒含) 焼成:良好

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形について	成形・調整について	備考
9	第1号住居跡 北西側土器溜まり	壺形 土器	口径17.6	口縁部は強く外湾しながら外方に開き,端部は平たくおさめる.	外面 口縁部上半はヨコナデ,以下ハケ目後にナデ 内面 口縁部ヒ半はヨコナデ,以下ナデ 口縁部下半にはシボリ痕有り	色調:淡赤褐色 胎土:密 焼成:良好堅緻
10	第1号住居跡 北西斜面	甕形 土器	口径13.0	口縁部は強く外湾しながら外上方に開く,端部は丸くおさめている.	口縁部内外面共にヨコナデ,以下外面はナデ,内面はヘラ削り 口縁部内面下半にシボリ痕有り	色調:暗褐色 胎土:やや密(石英大粒含) 焼成:良好堅緻
11	第2号住居跡	鉢形 土器	口径10.6 胴部最大径12.6	口縁部は「く」の字状に外反し,端部はわずかに肥厚させている.	外面 口縁部はヨコナデ,以下ナデ 内面 口縁部はヨコナデ,屈曲点直下はナデ,以下ヘラ削り 口縁端部に1条の凹線,肩部に6条の平行沈線文	色調:淡暗褐色 胎土:やや粗 焼成:やや良
12	第2号住居跡 内焼土中	鉢形 土器	口径10.4 胴部最大径12.3	口縁部は「く」の字状に外反し,端部を肥厚させている.	外面 口縁部はヨコナデ,肩部の施文帯以下はヘラ磨き 内面 口縁部はヨコナデ,胴部は最大径までナデ,以下ヘラ削り 肩部に6条の平行沈線文	色調:淡赤褐色 胎土:やや密 焼成:良好
13	第2号住居跡 埋土中	不明	底径4.8	底部はややくぼみ底を呈し,外湾気味に外上方に立ち上がっている.	外面 ナデ 内面 不明	色調:淡黄褐色 胎土:やや粗 焼成:良好
14	第1号土壙埋土中	甕形 土器	口径17.7 胴部最大径19.0 底径5.0 器高22.6	口縁部は「く」の字状に外反し,端部は肥厚させている.胴部最大径は比較的低い位置にあり,以下底部に向かって急速に細くなる.底部はややくぼみ底であり,そこから胴部に向け外湾気味に立ち上がる.	外面 磨滅が著しいため明確にはしがたいが,ナデか? 内面 口縁部屈曲点付近肩部あたりまでナデ,以下ヘラ削り 底部から1/4あたりまでナデ 口縁端部に2条の凹線 胴部の文様については磨滅が著しく不明	色調:淡黄褐色 胎土:やや密 焼成:やや良軟調 底部は熱を受けて赤変している.
15	第1号土壙埋土中	壺形 土器	口径30.0	口縁部は僅かに外湾気味に外上方にのび,端部は肥厚している.	内外面共にヨコナデ 口縁端部に2条の凹線	色調:暗褐色 胎土:やや密(黒雲母含) 焼成:やや不良

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形について	成形・調整について	備考
16	第1号土壙埋土中	鉢形土器	口径9.9 胴部最大径11.5	口縁部は「く」の字状に外反し,端部は僅かに肥厚させている.胴部最大径を中位以下に持ち,以下底部に向けて直線的に細くなっている.	外面 口縁部ヨコナデ,胴部ナデ,最大径以下ヘラ磨き 内面 口縁部ヨコナデ,屈曲点周辺ナデ,以下ヘラ削り 頸部に5条の凹線文,胴部最大径付近に3条の波状文 以下列点文	色調:淡黄褐色 胎土:やや密 焼成:やや良
17	第2号土壙埋土中	不明		口縁部は外反し,端部は肥厚している.	内外面とも磨滅が著しく調整不明 口縁端部に2条の凹線	色調:淡褐色 胎土:やや密(黒雲母含) 焼成:やや良
18	第2号土壙埋土中	不明	底径5.7	底部は平底を呈し,外上方に緩く外湾しながら立ち上がる.	内外面ともナデ	色調:淡黄褐色 胎土:密 焼成:良好
19	第3号土壙埋土中	高坏	口径23.0 脚柱部径5.8 脚端部径12.9	口縁部は直線的に上方に立ち上がり端部は平たくおさめる. 脚柱部は下方に直線的にのび,裾部は緩く外湾しながら「ハ」の字状に開く.脚端部は平たくおさめる.	口縁部外面は6条の凹線文 内面不明,坏部は内外面ともにヘラ磨き,坏底部はナデである 脚柱部外面は幅広いヘラ磨きの後に10条の凹線文,内面は荒い削り 裾部は外面ヘラ磨き,内面ナデで,端部は平たく収められ3条の凹線が施されている 坏底部には円盤充填の痕跡. 脚柱部にはシボリ痕が残る	色調:淡黄褐色 胎土:やや密 焼成:やや不良軟調
20	第3号土壙埋土中	不明	底径5.6	底部はややくぼみ底を呈し,僅かに外湾気味に外上方に立ち上がっている.	内外面ともナデ	色調:赤褐色 胎土:やや粗 焼成:やや不良軟調
21	第4号土壙東斜面	壺形土器	口径14.7	口縁部は「く」の字状に外反し,端部を僅かに肥厚させている.胴部は直線的に外下方に開く.	口縁部は内外面共にヨコナデ,以下ナデ	色調:淡赤褐色 胎土:やや密(長石大粒含) 焼成:やや良
22	住居跡状遺構南側	甕形土器	口径22.6 胴部最大径22.0	口縁部は「く」の字状に外反し,端部を肥厚させている. 胴部最大径は中位付近の低い位置にある.	外面 口縁部はヨコナデ,以下ナデ 内面 口縁部はヨコナデ,屈曲点と胴部最大径との中間点までナデ,以下ヘラ削り 口縁端部に3条の凹線,胴部最大径付近にヘラ状工具による押引文	色調:淡褐色 胎土:やや粗 焼成:良好 胴部最大径以下に煤付着

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形について	成形・調整について	備考
23	第1号住居跡 周辺	甕形 土器	口径30.0	口縁部は水平に近い角度 で外方に伸び、端部は強 く摘むことにより平たく おさまられている。胴部 は直線的に外下方に開く。	内外面共に口縁部はヨコナ デ,以下ナデ	色調:淡褐色 胎土:やや粗(石英 大粒含) 焼成:良好堅緻
24	第1号・第2 号土壇南西側 土器溜まり	甕形 土器	口径10.6 胴部最大 径12.2 底径3.0 器高14.8	口縁部は「く」の字状に 外反し、端部を僅かに肥 厚させている。 胴部最大径は比較的高い 位置にあり、以下急速に 細くなり、小さな底部に 至る。底部はくぼみ底を 呈し、外湾しながら上方向 に立ち上がる。	外面 口縁部はヨコナデ, 以下ナデ。底部周辺 は、明瞭な痕跡を残 す縦方向の強いナデ 内面 口縁部ヨコナデ,胴 部は最大径までナデ, 以下ヘラ削り 口縁端部に1条の凹線,肩 部に貝殻腹縁等による羽状 文	色調:暗赤褐色 胎土:やや粗 焼成:やや良 底部は熱により赤変
25	第1号・第2 号土壇南西側 土器溜まり	甕形 土器	口径28.4 胴部最大 径34.5	口縁部は「く」の字状に 外反し、端部を肥厚させ ている。 胴部は屈曲点あたりから 緩く内湾しながら下方に のび、中位当たりで最大 となる。最大径以下は直 線的に急速に細くなるよ うである。	口縁部内外面共にヨコナデ 以下は磨滅が著しいため不 明 口縁端部に3条の凹線	色調:淡黄褐色 胎土:粗(大砂粒黒 雲母多く含) 焼成:良好
26	第1号・第2 号土壇南西側 土器溜まり	不明	底径5.7	底部から強く外湾しなが ら外上方に立ち上がる。	外面はハケ目後ナデ,内面 はヘラ削り	色調:淡黄褐色 胎土:粗(大砂粒黒 雲母多く含) 焼成:良好
27	第1号・第2 号土壇南西側 土器溜まり	壺形 土器		頸部は直線的にのび、胴 部は外湾しつつ外下方に 開く。	内外面共にナデ 頸部に4条の凹線文及びそ の直下に凹線による長さ8 mm前後の破線文	色調:赤褐色 胎土:やや密 焼成:良好
28	第1号・第2 号土壇南西側 土器溜まり	不明	底径3.4	底部は僅かにくぼみ底を 呈し、外湾気味に立ち上 がった後、直線的に上方 にのびる。	外面は比較的丁寧なナデ, 内面は底部周辺はナデ,以 後ヘラ削り	色調:淡赤褐色 胎土:やや粗(石英 大粒,黒雲母 含) 焼成:やや良
29	第1号・第2 号土壇西側土 器溜まり	高坏	口径21.1	口縁部は直線的に上方に 立ち上がり、端部は肥厚 させている。坏部は、直 線的に内側下方にのびる。	口縁部は内外面共にヨコナ デ,坏部は外面がヨコナデ 内面はヘラ磨き 口縁端部は2条の凹線	色調:明赤色 胎土:極密(均一な 極細砂を含む 焼成:良好軟調 混和材を篩分けして いる可能性有り

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形について	成形・調整について	備考
30	第1号住居跡 北西斜面	鉢形 土器	口径24.8 胴部最大 径23.9	口縁部は「く」の字状に 外反し,端部を僅かに肥 厚させている.	口縁部は内外面共にヨコナ デ,以下は磨減が著しく不 明.肩部に貝殻腹縁等によ る押引文	色調:淡黄褐色 胎土:粗(大砂粒多 く含) 焼成:やや不良 外面に煤付着

IV ま と め

牛田早稲田遺跡出土土器の編年的位置づけとその問題点

本遺跡からは2時期に分けられる土器が出土しているが、特に出土土器の大部分を占める古い時期の土器については、その大半が中期終末の土器と上深川Ⅰ式土器との中間的な特徴を示すものであり、その編年的な位置づけについて慎重な検討を要するところである。

市内出土の中期土器については、中山貝塚を始めとして墳墓や土壙等において少量の出土が知られるが、器種、個体数共に限定されており、その総体としての把握は困難な状況である。そのため、周辺地域を参考として(1)中期後半から終末の時期の土器の特徴を概観すれば、! 口縁部は屈曲点より水平に近い形で外方に延び、端部は若干肥厚させている。口縁端部の肥厚化は終末に近づくにつれて著しくなり、上深川Ⅰ式土器にいたって顕著になるようである。” 壺及び甕の胴部は、最大径を中位に持ち、内面にヘラ削りの痕跡を残すものについては中位あたりまでのものがほとんどである。# 底部は、胴部最大径に対して相対的に小さいものが多く、外湾しながら外上方に立ち上がる。\$ 施文方法は、櫛描きによる波状文や凹線文、刺突文等が主体をなしている。特に、終末に近づくにつれて肥厚化した口縁端部等に凹線文が多用化されるようになる。% 施文帯の位置については、最大径のある胴部中位を中心にそれより上部の肩部、頸部、口縁部等に施されている。以上の様な点が共通する特徴として指摘しえよう。

次に、それに次ぐ時期である上深川Ⅰ式土器の特徴を整理すれば、器種、法量等によって多少の相違はあるが、! 口縁部は、斜め上方に直線的にのびて「く」の字状を成し、端部は肥厚化が著しく断面「U」字形の凹線文が施されているのが一般的である。” 壺及び甕の胴部は、最大径を中位より高い位置に持ち、内面のヘラ削りの位置も肩部付近を中心とした比較的高い位置にまで残るようになる。# 底部は外湾するカーブを描いて外上方に立ち上がるものが一般的であり、内外面共にナデにより仕上げられている。\$ 施文方法としては、口縁端部を除き凹線文は見られなくなり、刺突文等が主流を成すようになる。また、壺や高杯等については、数条の凹線文や2～3段の波状文を施すものがある。% 施文帯の位置は、徐々に中位から肩部へと上昇し、口縁端部への施文が一般化するのを除いては全体に施文が減少する傾向を見せる。という特徴をあげることができよう。

本遺跡出土の古式の土器について見れば、上述した双方の特徴が部分的に共存しており、極めて過渡的な様相を呈していると考えられる。ただ、上深川様式土器を最も特徴付けていると考えられる「く」の字状に外反した単純口縁は、1点を除いて全てに共通する特徴であり、そのほとんどが上深川Ⅰ式土器に属していることを示唆している。ただ、土器(No.23)については口縁部が水平に近い角度で外方に延びており、胴部もやや膨らみながらではあるが垂直に近い形で下方に続くなど中期的な特徴を示しており、遺跡の存続期間の上限が中期終末にまでさかのぼる可能性が高いと考えられる。以上のように、本遺跡の古式の土器群における中期的特徴の共存現象は、これらの土器が時期的に中期と後期との中間的な位置に有ることを主な要因としていることを示すものであり、これらの様相は上深川様式土器成立時の過渡的な様相を示していると考えられる。

次に、本遺跡成立時を前後する時期の広島湾周辺の遺跡を概観すれば、以下のとおり

となる。広島湾周辺の地域において丘陵尾根上に弥生時代の遺跡が出現するのは、弥生時代中期でも中葉から後半の時期である。この中で太田川下流域でも内陸部に位置する丸子山遺跡（安佐北区可部）、佐久良遺跡（安佐北区白木）が大規模な墳墓群として知られるのに対し、所謂沿岸部の遺跡は総じて遺物の出土点数も少なく存続時期も短期間であること、直接太田川を眼下に望む位置に立地していること等が共通している。また、これらの遺跡において建物跡等の存在を想定しえたのは大明地遺跡のみである。一方、それに次ぐ時期である中期終末の土器を含む遺跡については、遺跡数自体は多くないが後期にまで継続するものがほとんどであり、集落の使用時期の上限を上深川I式の時期にもつものも含めると、大規模な集落のほとんどは中期終末から後期初頭の時期にその使用が開始されていると考えられる。以上のことから、上深川様式土器の成立と広島湾沿岸における集落の丘陵上への進出という事態が密接な関係を持っている事が予想され、太田川下流域における中期から後期への変化が単に土器様式の変化としてのみではなく、他の要素をも含めた社会的な現象として生じたものと捉えることも可能であろう。

また、集落の丘陵上への進出に先立って、中期中葉頃から少量の土器のみの出土を中心として単発的な遺跡の存在が報告されており、丘陵上にこれらの痕跡を残した人々の生活拠点が近隣の平野部等にあったことも考えられる。しかし、この時期の遺構・遺物共に極めて少量であり、平野部における遺構・遺物の出土もほとんど報告されていないため、集落の存在は否定しきれないにしても極めて小規模かつ不安定なものであったことが予想される。ただ、本遺跡に近接する牛田早稲田神社遺跡の場合、住居跡は未発見であるが、比較的安定した生活を予想させる貝塚を伴っており、時期的にも本遺跡に連続する時期の遺跡であることから、本遺跡との直接的な関係を否定しきれない。反面、両者の立地について比較すれば、一方が太田川河口付近を直接眼下に見下ろす位置にあるのに対して、他方が山中の湧水点近くの谷地形を見下ろす丘陵尾根上に営まれているというように、極めて象徴的な在り方を示していると考えられよう。以上のように、例えば集落の丘陵上への進出という変化が近隣平野部からの集落の移動を意味しているとしても、その変化の要因は、人口増に伴う近隣丘陵上への集落進出とは単純には捉えがたく、農耕技術の発展等に起因する生活基盤の大幅な変化を意味するものと考えられ、全国的な中期から後期への土器様式の変化やそれを促した諸要素との関連を強く窺わせるものである（2）。さらに言えば、中期における沿岸部と内陸部の遺跡の様相の相違は、後期集落に直結するほど多数の集落の存在を沿岸部のみで想定することの困難さを示唆するものであり、後期集落の故地を考察する上で考慮すべき事象と考えられよう。

いずれにしろ、本遺跡から検出された第2号住居跡が属すると考えられる中期終末から後期初頭という時期は、太田川下流域における丘陵上の集落跡としては最古の部類に入るものと考えられ、当時の太田川下流域における集落の状況や土器編年等を考察するうえで極めて貴重な資料を提供しえたと考えられよう。

集落の構成及び問題点

調査の結果、遺構は竪穴式住居跡2軒、住居跡状遺構1か所、土壇4基、掘り込み状遺構1か所を確認した。まず、出土した土器から各遺構の時期について考察してみたい。本遺跡の集落の時期は2時期に別れると考えられる。第1期は弥生時代中期終末から上深川I式の時期で、第2号住居跡・住居跡状遺構・第1号土壇・第2号土壇・第3号土壇から

集落が構成されていたと考えられる。第2期は、上深川Ⅱ式の終末からⅢ式初頭の時期で、第1号住居跡のみがこの時期の遺構としてあげられる。また、第4号土壙については時期は不明であるが、周辺からは上深川Ⅰ式に属する土器のみが出土しており、第2期の遺構である第1号住居跡との関係を予想させる何物もないため、ここでは一応第1期の遺構として捉えておきたい。

第1期と第2期の集落の関係については、両者が属する時期が大きく隔たっており、定期的に両者の中間的な特徴を示す土器がまったく出土していないことから、第1期と第2期の間には断絶期間が存在したと考えられる。したがって、本遺跡は、弥生時代中期終末から上深川Ⅰ式の時期にかけて集落が成立して上深川Ⅰ式の時期を中心に営まれたが一度廃絶し、その後上深川Ⅱ式終末の時期に至って再び集落が営まれ、遅くとも上深川Ⅲ式（古）の時期には終焉を迎えたと考えられよう。

次に各期の集落について考察を加えると次のようになる。

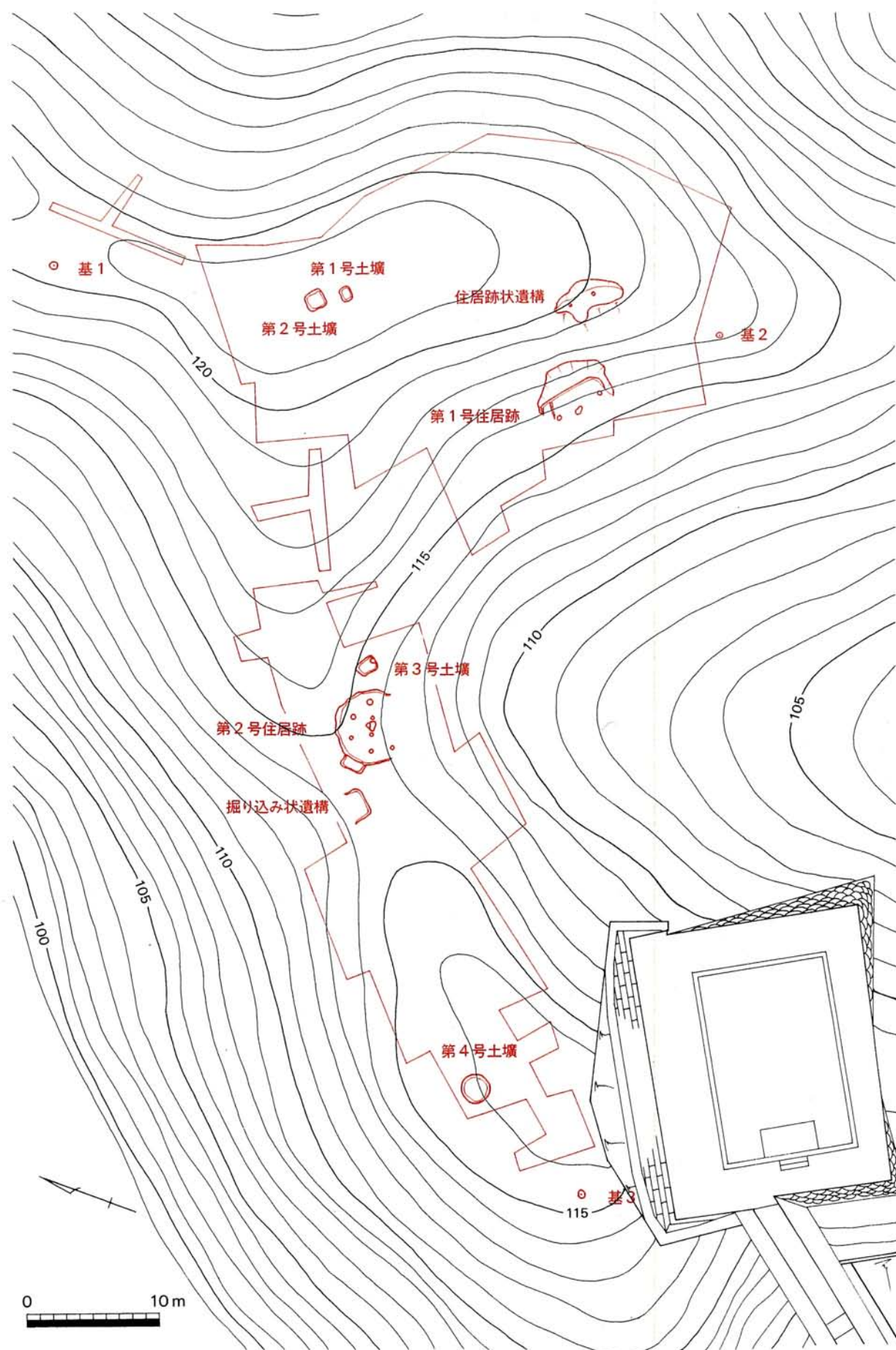
第1期では遺構の構成において若干土壙が多い感があるものの、弥生時代後期の広島湾頭において尾根上に立地した他の集落と大差はない。すなわち、第1期の集落については、直近に湧水点をもち、比較的豊かな水量を誇る西側の谷を意識して営まれたものと考えられ、周辺で最も早い時期に丘陵上への進出をはたした集落の一つに数えられるだけに、この地への定着の主な要因が西側の谷地形にあることは十分に予想される。しかし、当該期の集落は、属すると考えられる土器の時期も比較的短く、住居跡についても建て替え等の痕跡も確認できなかったため、存続期間が比較的短かったものと考えられる。第1期集落終焉の理由は明確にしえない。

第2期についてであるが、第1期に比べて属する遺構も住居跡1軒と少なく、当該期に属する土器についても住居跡内及びその周辺に限られている点に特色がある。これについては、存続時期の相違に起因しているとの考え方もできようが、第2期の属する土器が特徴的に同様な様相を示すもので占められているとはいえ、1回の建て替えの可能性が高く、定期的に第1期の存続期間とそれほど大きな差があるとは考えられないため、その出土状態に疑問が残る。すなわち、第1期の集落が多く遺構を使用し、多くの土器を消費し、かつそれらを広い範囲に廃棄していることから推測しえることは、前述したような丘陵平坦面を可能な限り使用した後期集落に通例の生活であり、それに対して第2期の葉落の遺構・遺物の量的及び空間的に限定された姿は、恒常的な通常の意味の生活が営まれたとは想像しがたく、生活痕跡の極めて希薄な姿と言うことができよう。これは、同時期の広島湾頭において尾根上に立地した集落とは異なるあり方と考えられ、極めて特異な例と考えられよう。その場合、第2期の集落において行われた生活は、生活活動の極めて乏しく、かつ少人数で断続的なものととらえることが可能であり、これは独自性をもった内部完結的な葉落というよりは、他の集落の存在なくしては考えられない、言わば従属的な集落のあり方を示すものととらえることも可能であろう。その場合、可耕地を伴わない特殊な立地をとる「高地性集落」として著名な西山貝塚群が本遺跡の立地する同一山塊上に所在することは、第2期の集落の性格を考察する上で考慮しておくべき事実と考えられよう。

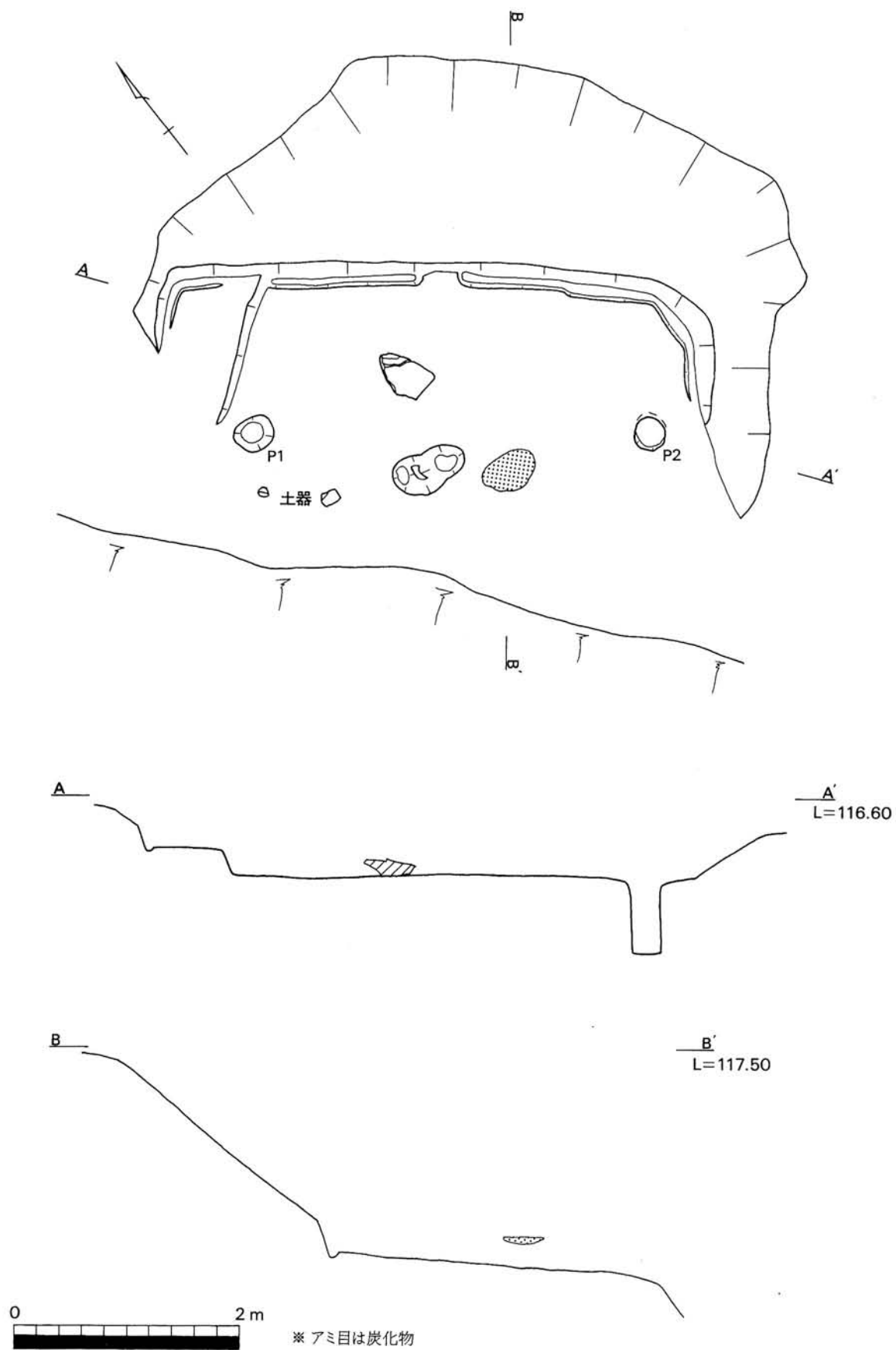
いずれにしろ、西山山麓における弥生時代集落跡の調査は今回が初めてであり、西山貝塚群の性格についても明確にしえない点が多々有ることから、今後の発掘調査の成果を待つて更に一体的な考察を深めていく必要があるだろう。

注

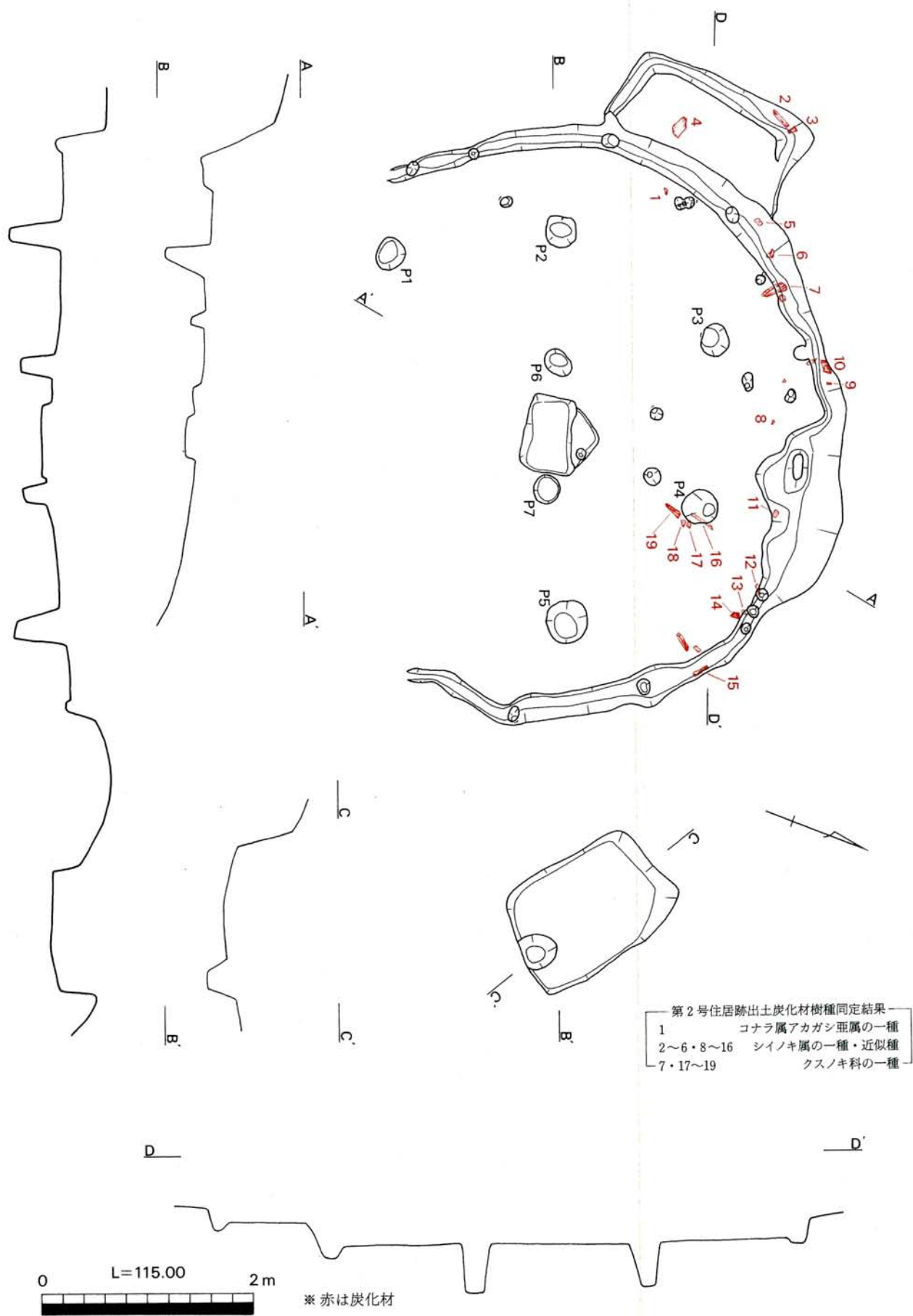
- (1) 妹尾周三「安芸地域」『弥生土器の様式と編年山陰・山陽編』木耳社 1992
藤野次史「鏡西谷遺跡の弥生土器」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』1984
広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』1982
広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(け)』1983
(財)広島県埋蔵文化財調査センター『和田原遺跡』1988
(財)広島県埋蔵文化財調査センター『奥田大池遺跡』1983
広島市教育委員会『岡谷遺跡・狐が城古墳発掘調査報告』1985
岡谷遺跡土壌内出土の一群の土器を弥生時代中期終末として位置づけ、本遺跡出土の上深川Ⅰ式土器をそれに続く時期のものとして捉え、整理した。
- (2) 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』岩波書店 1989



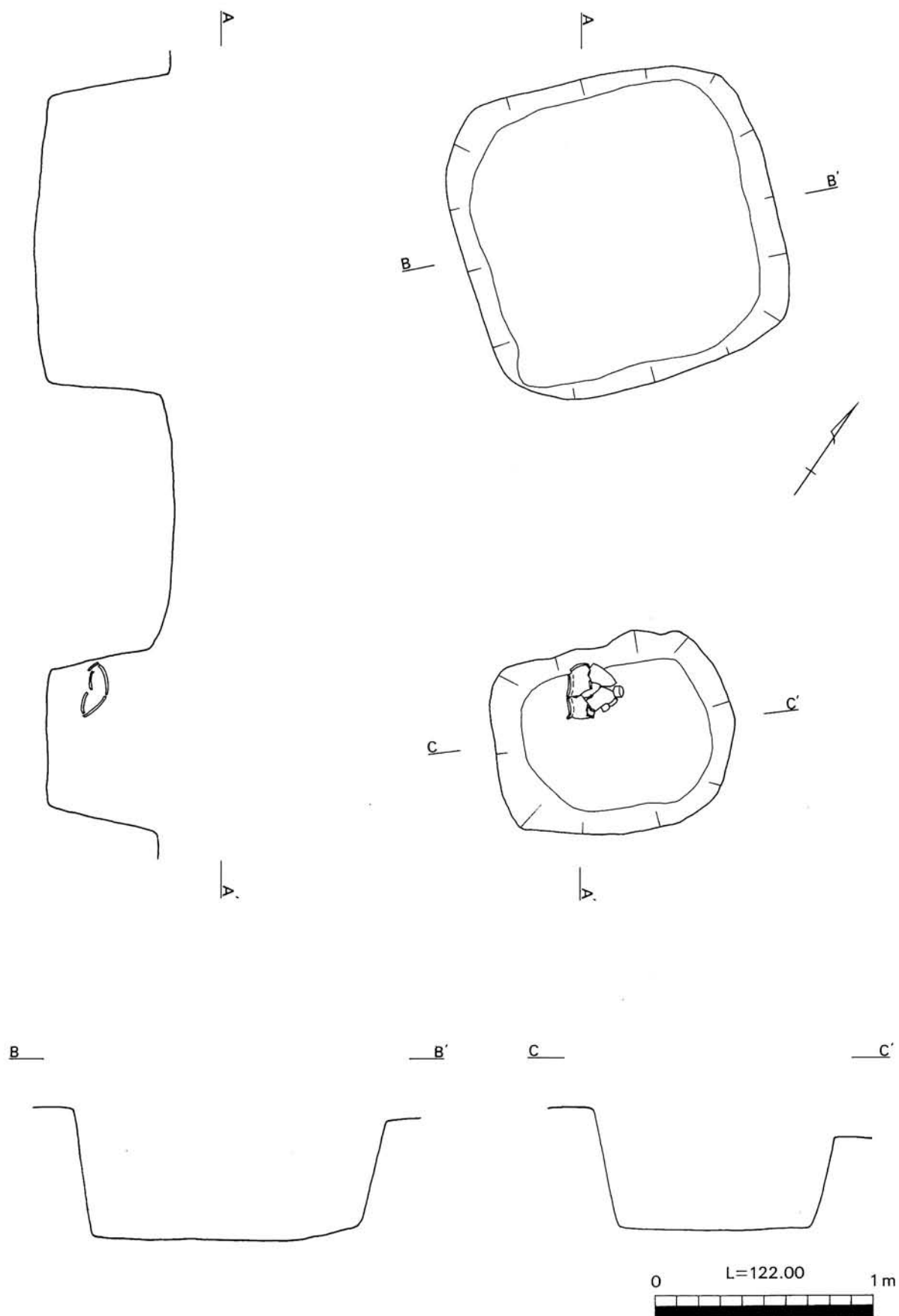
第 2 図 牛田早稲田遺跡遺構配置図



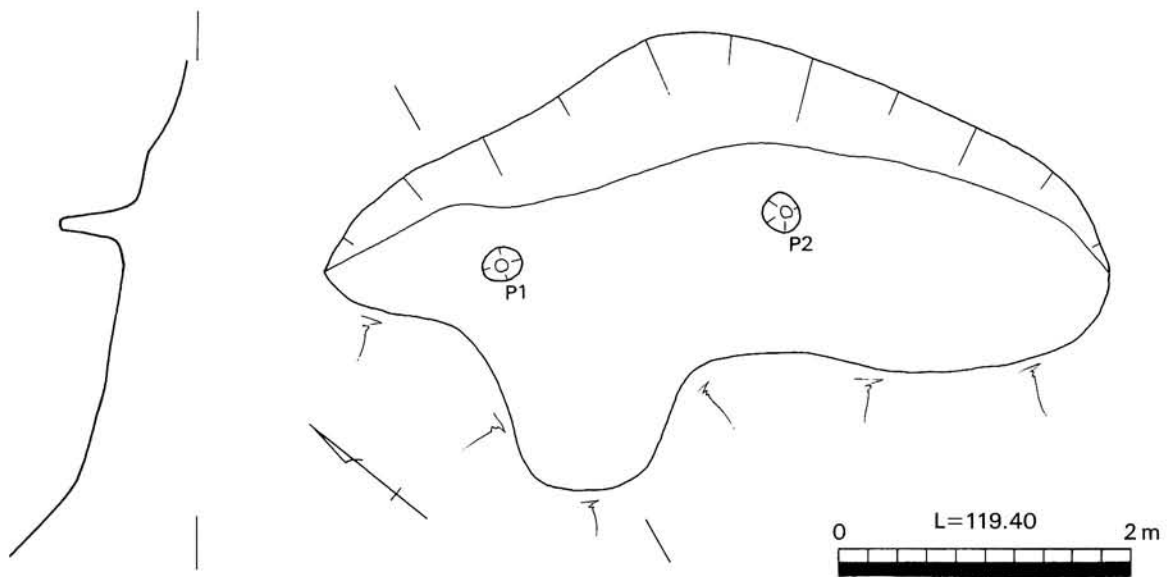
第3図 第1号住居跡実測図



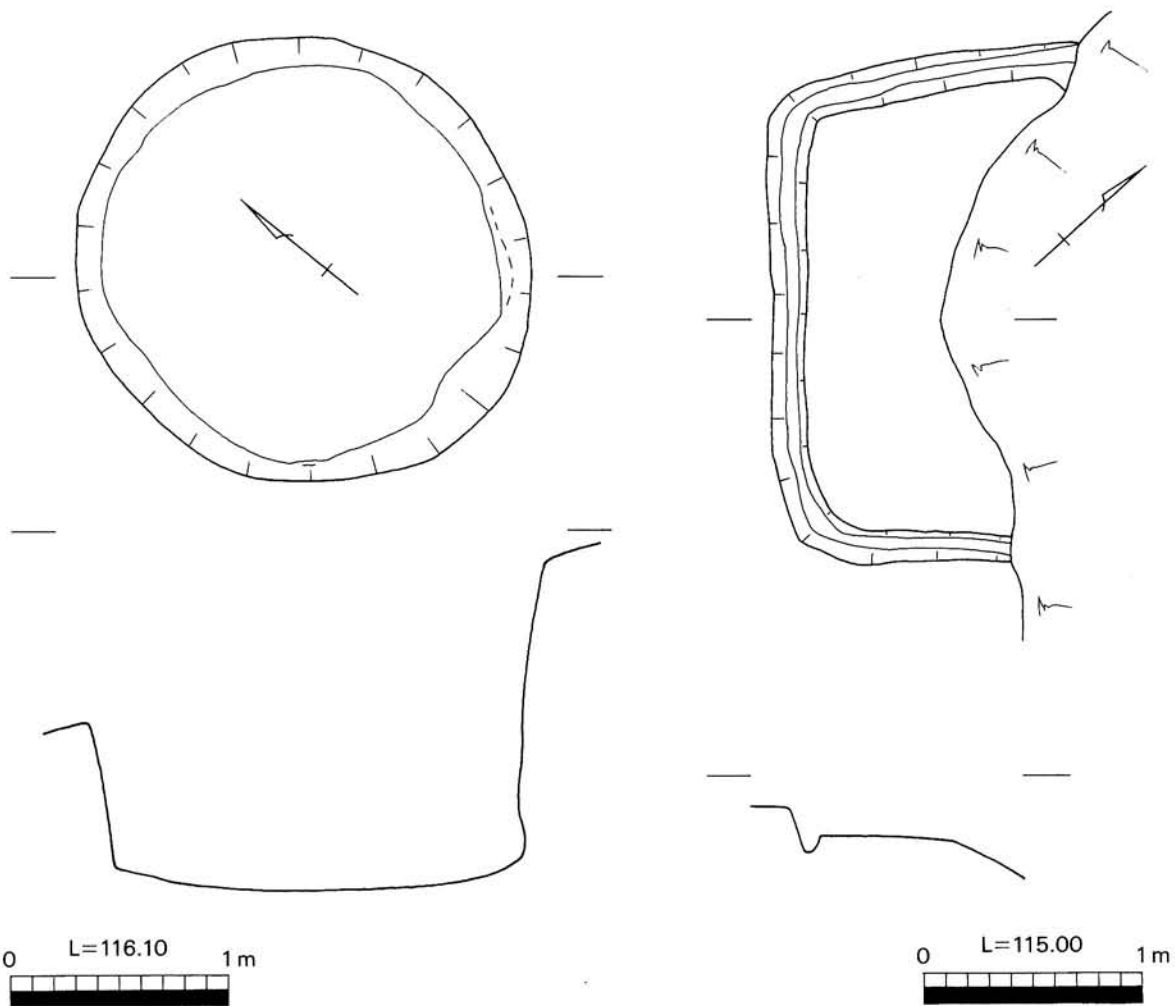
第4図 第2号住居跡及び第3号土壌実測図



第5図 第1号・第2号土坑実測図

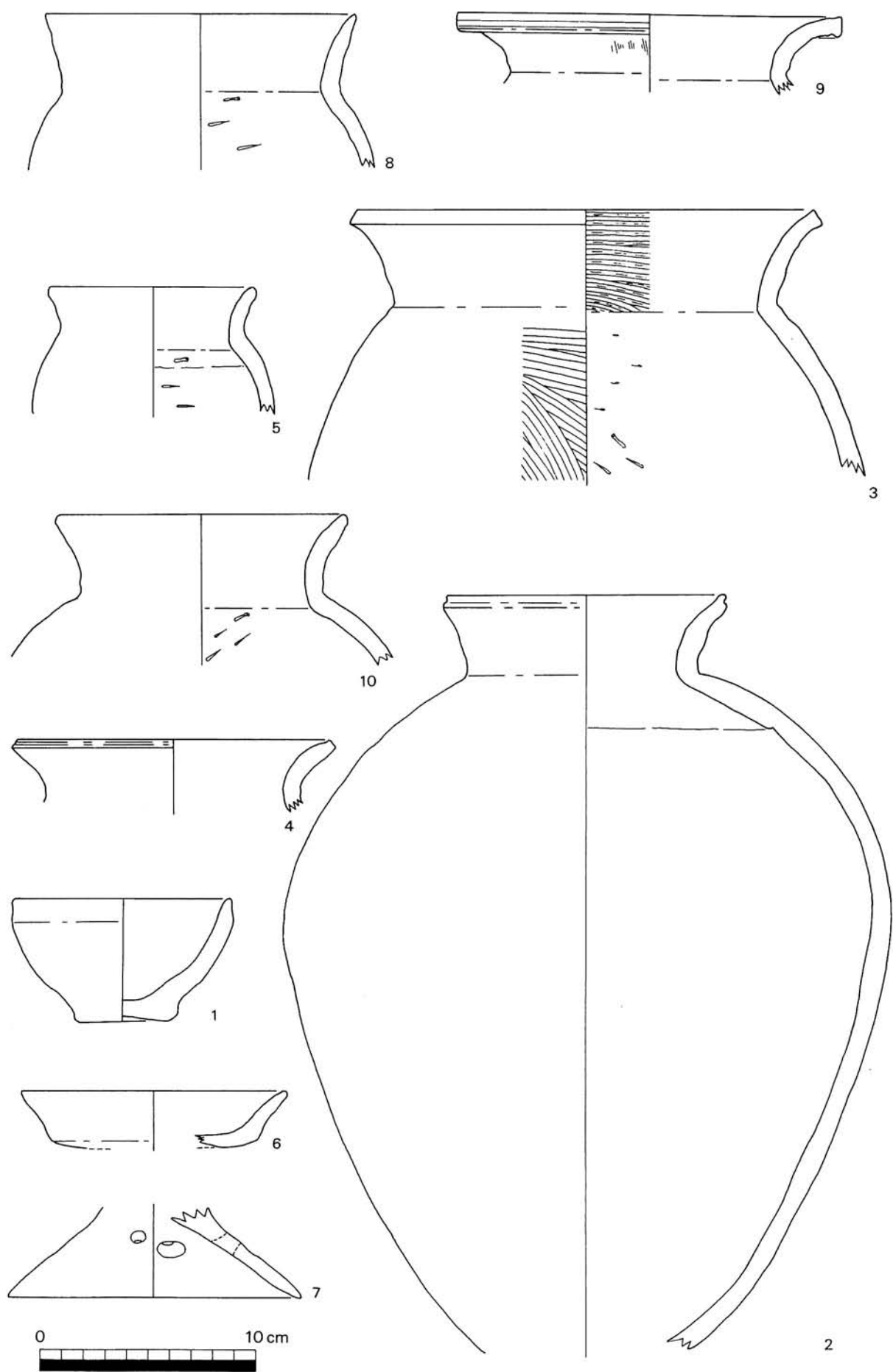


第6図 住居跡状遺構実測図

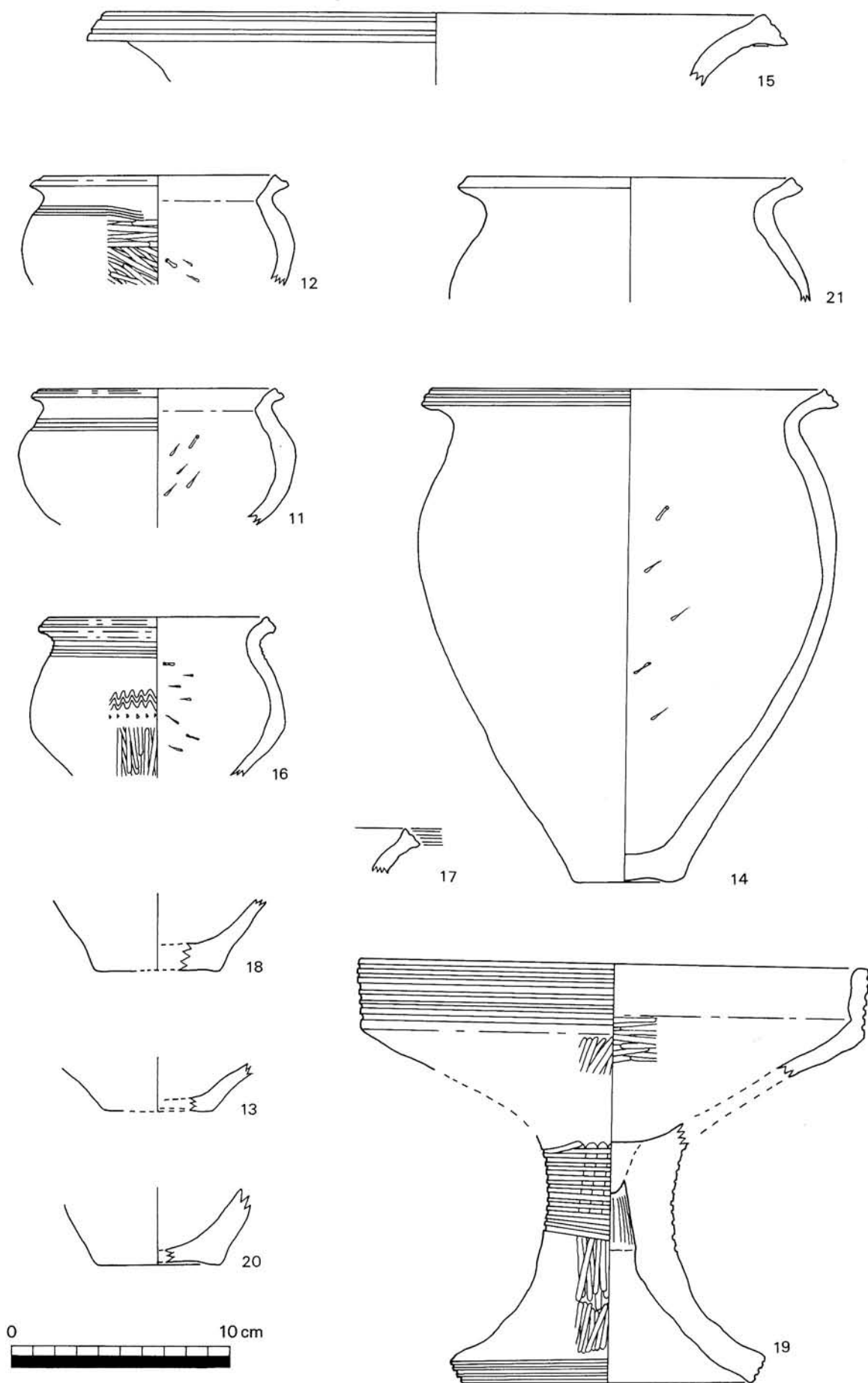


第7図 第4号土壌実測図

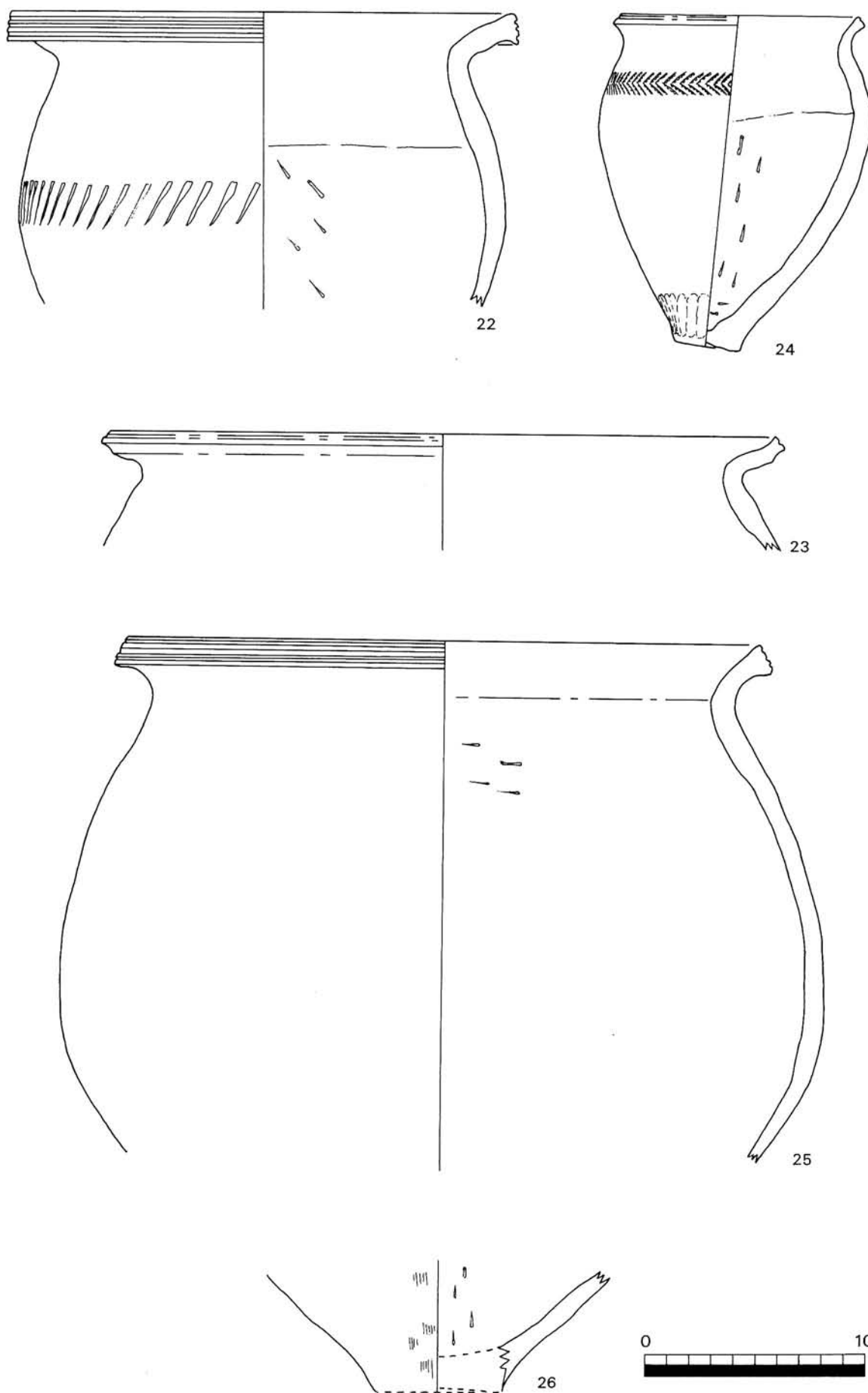
第8図 掘り込み状遺構実測図



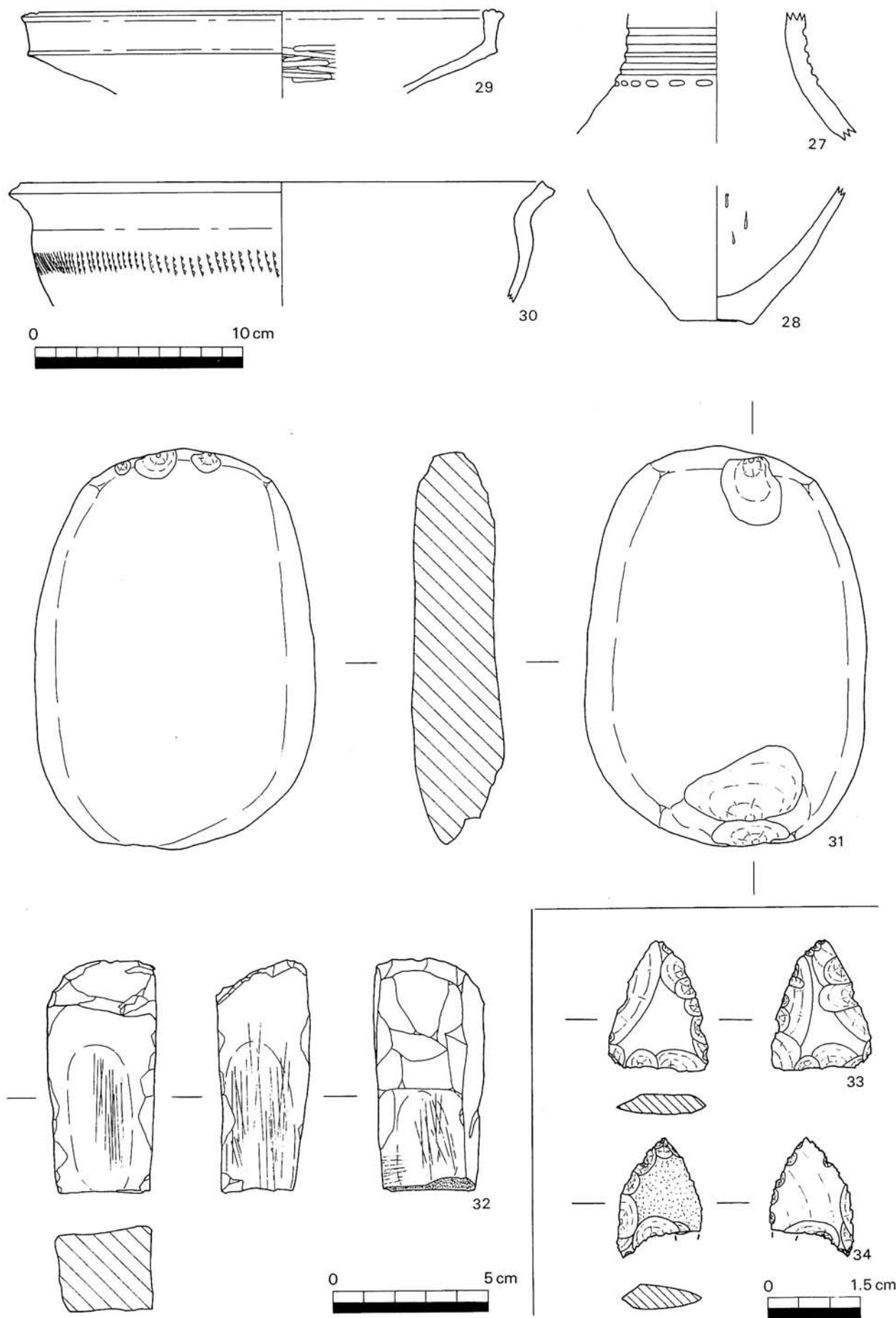
第9図 牛田早稲田遺跡出土土器実測図(1)



第10図 牛田早稲田遺跡出土土器実測図(2)



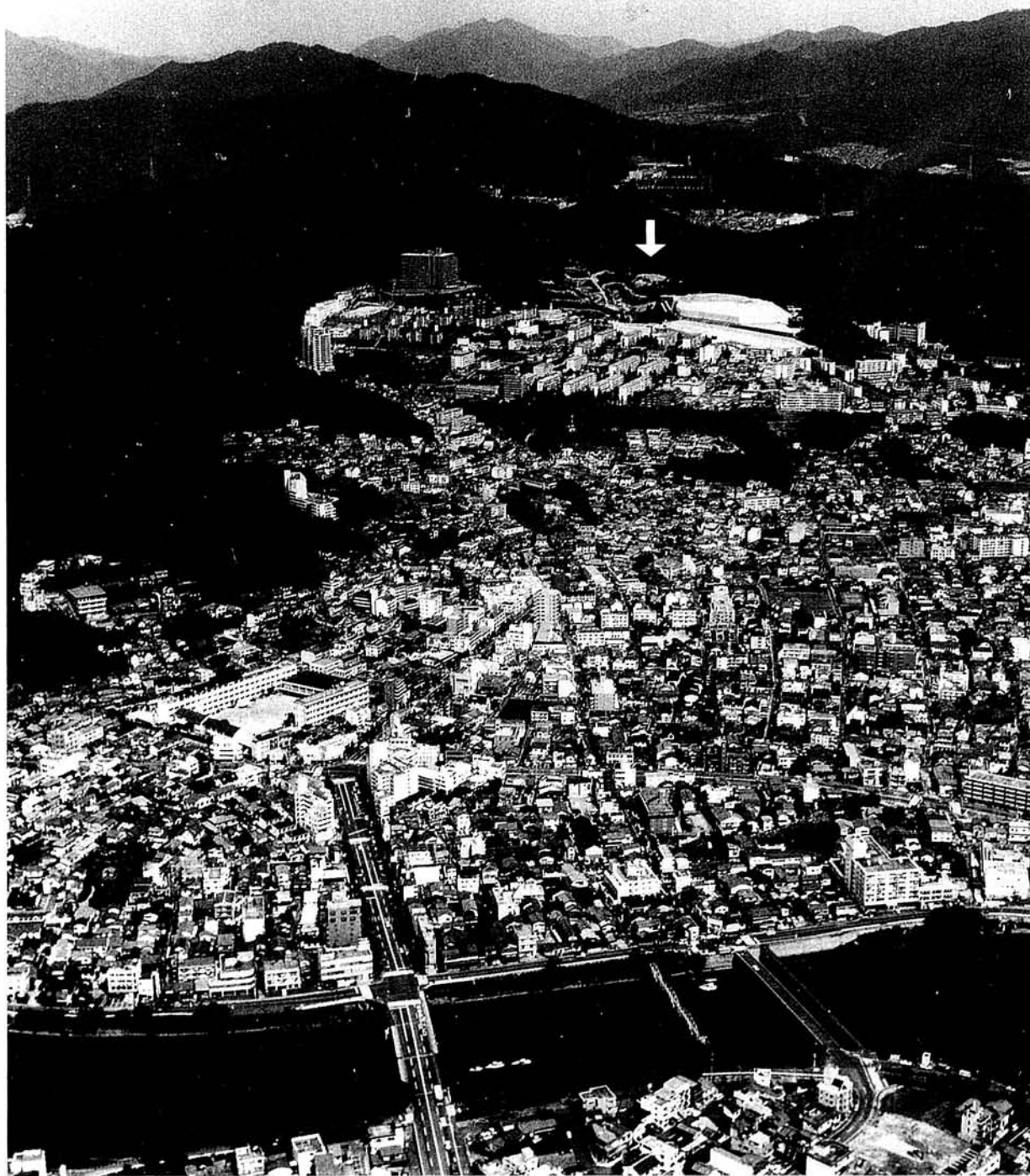
第11図 牛田早稲田遺跡出土土器実測図(3)



第 12 図 牛田早稲田遺跡出土遺物実測図

圖

版



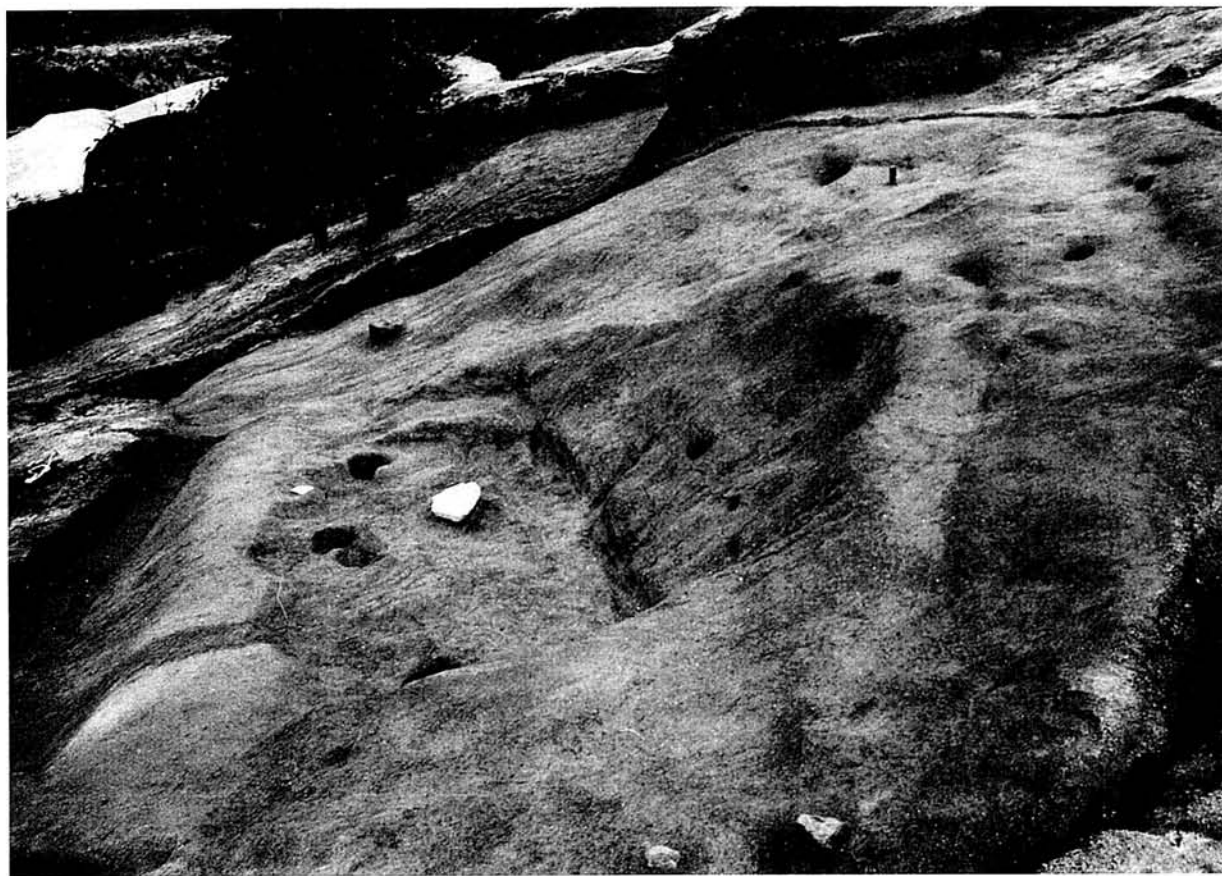
牛田早稲田遺跡遠景（南西から）



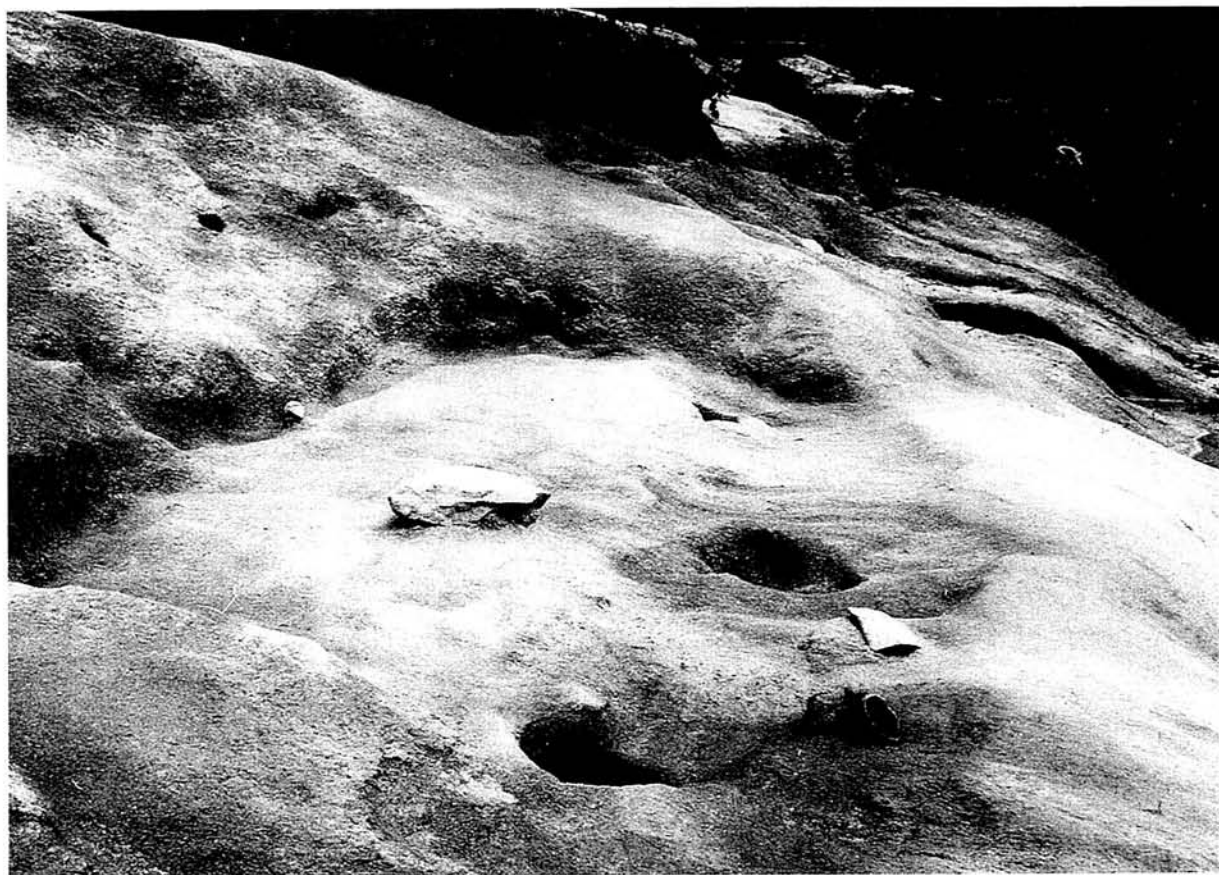
a. 牛田早稲田遺跡全景（調査前）



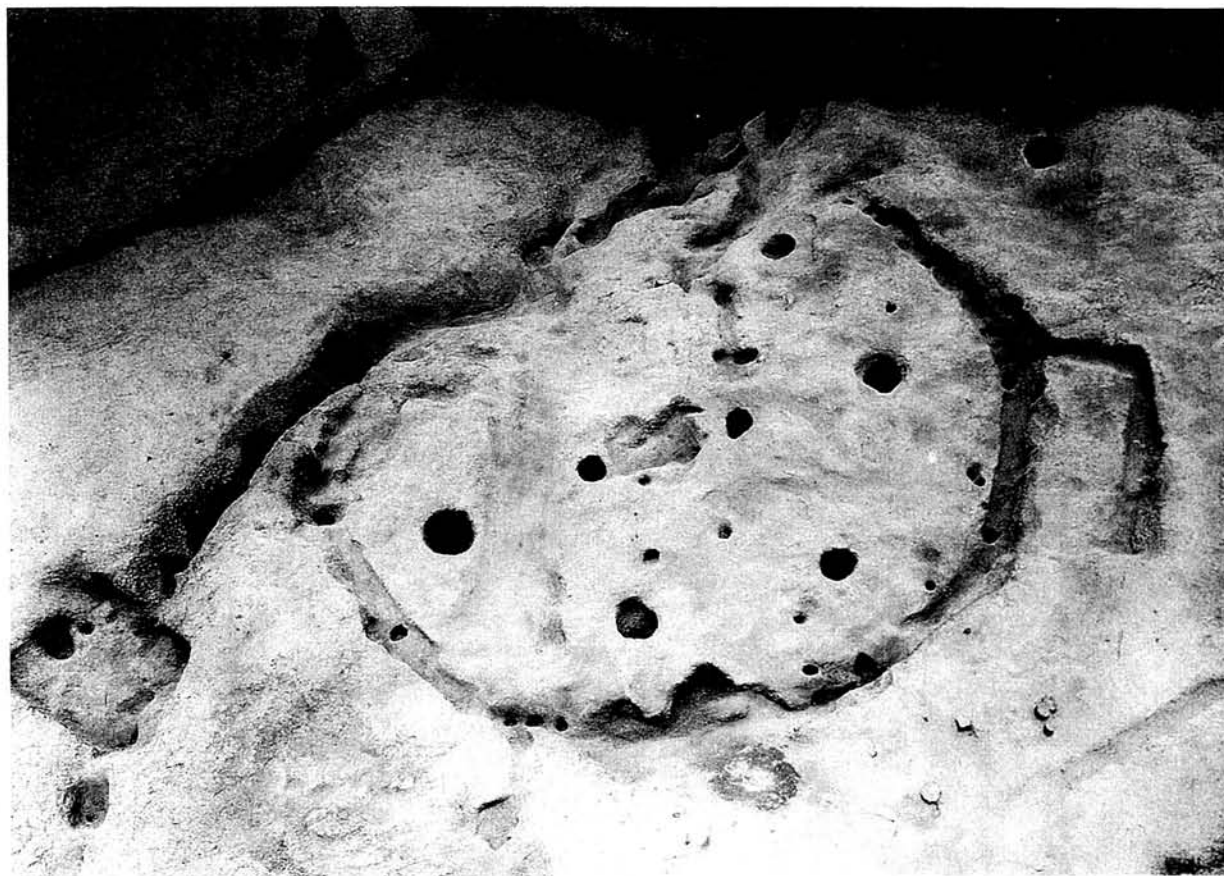
b. 牛田早稲田遺跡全景（調査後）



a. 第 1 号住居跡



b. 第 1 号住居跡土器出土状況



a. 第2号住居跡及び第3号土壇



b. 第2号住居跡炭化材出土状況



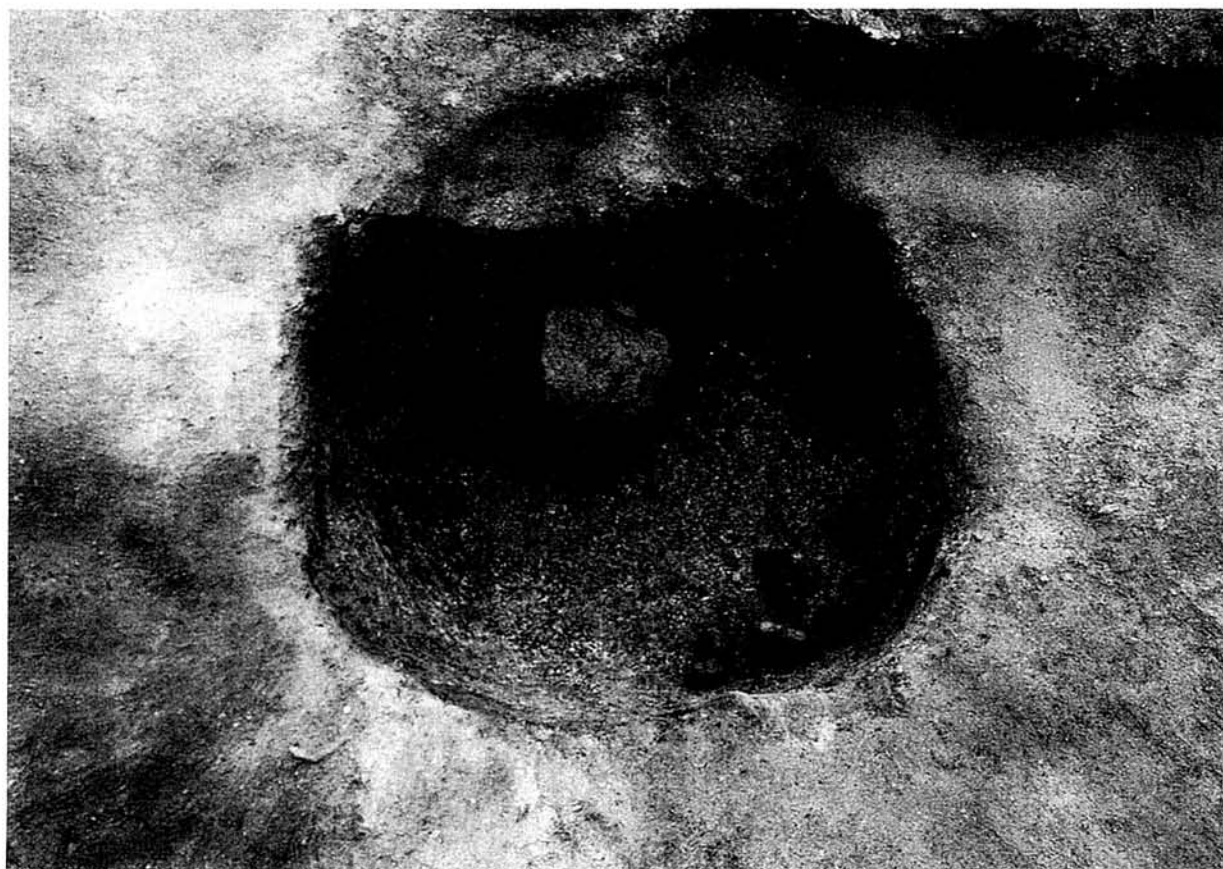
a. 牛田早稲田遺跡近景（南から）



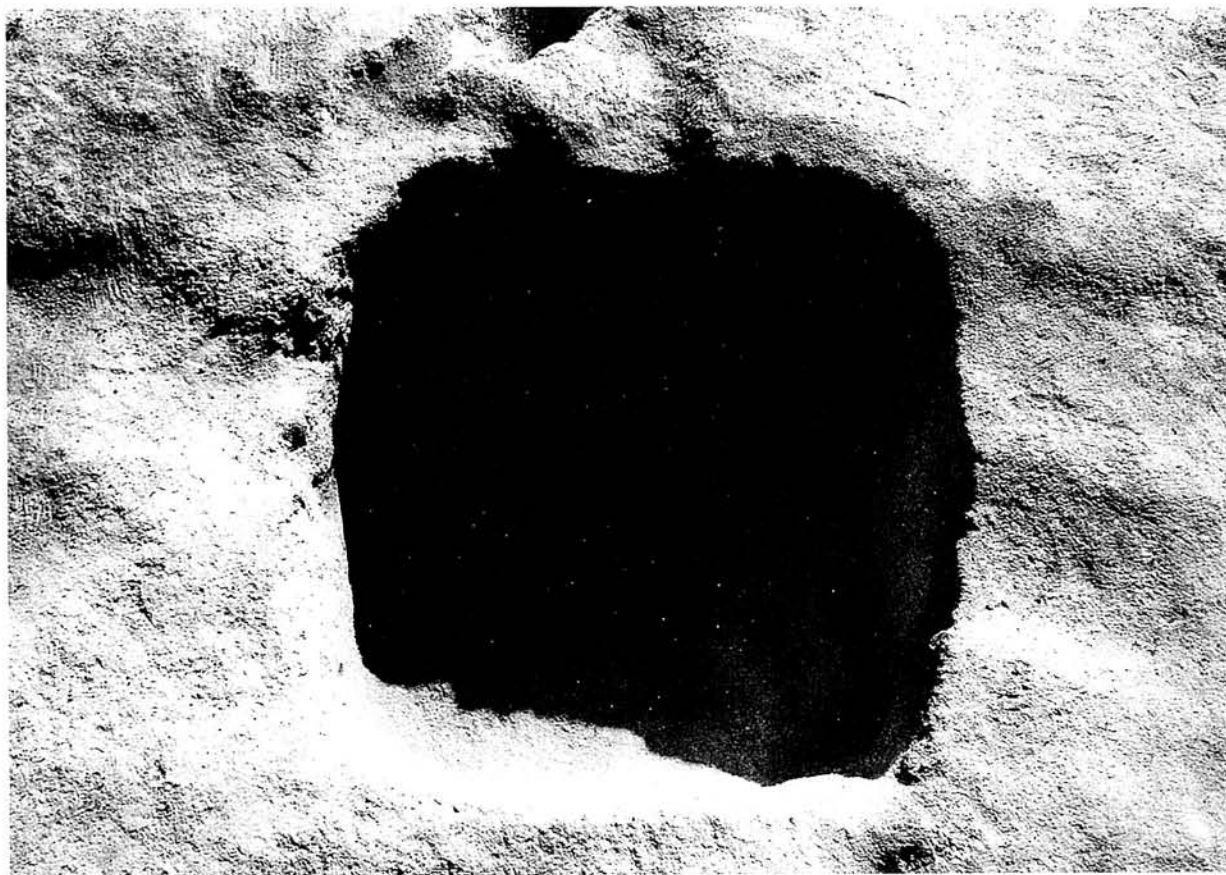
b. 住居跡状遺構



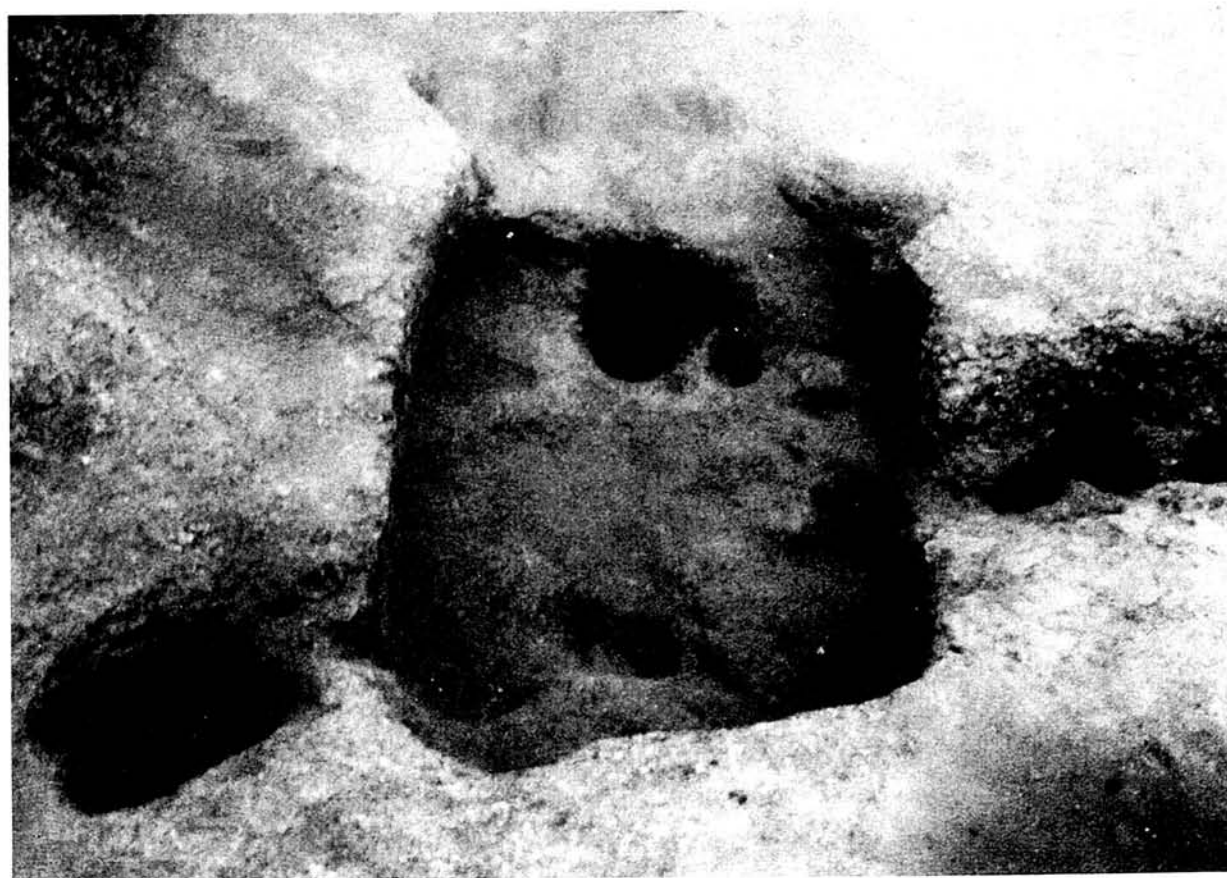
a. 第1号・第2号土壙近景（東から）



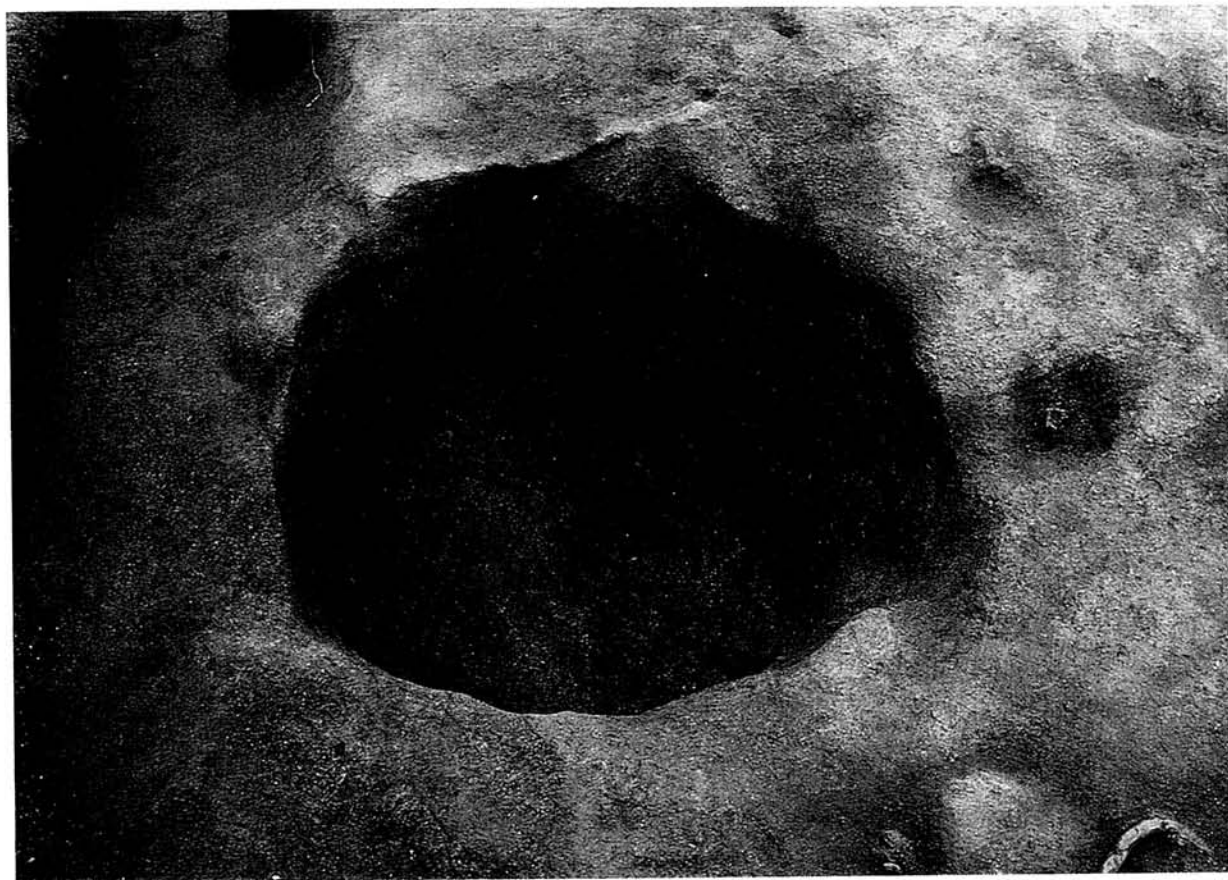
b. 第1号土壙土器出土状況



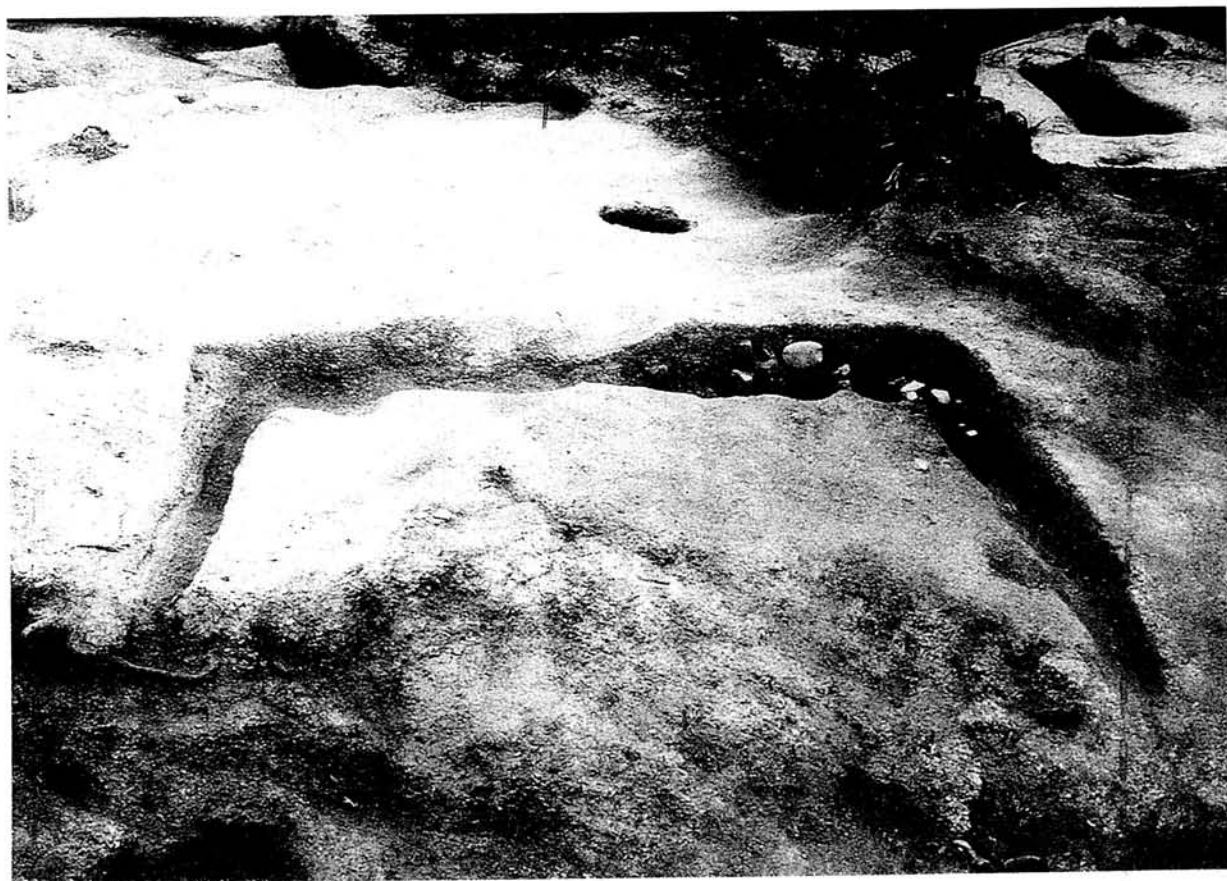
a. 第 2 号土壤



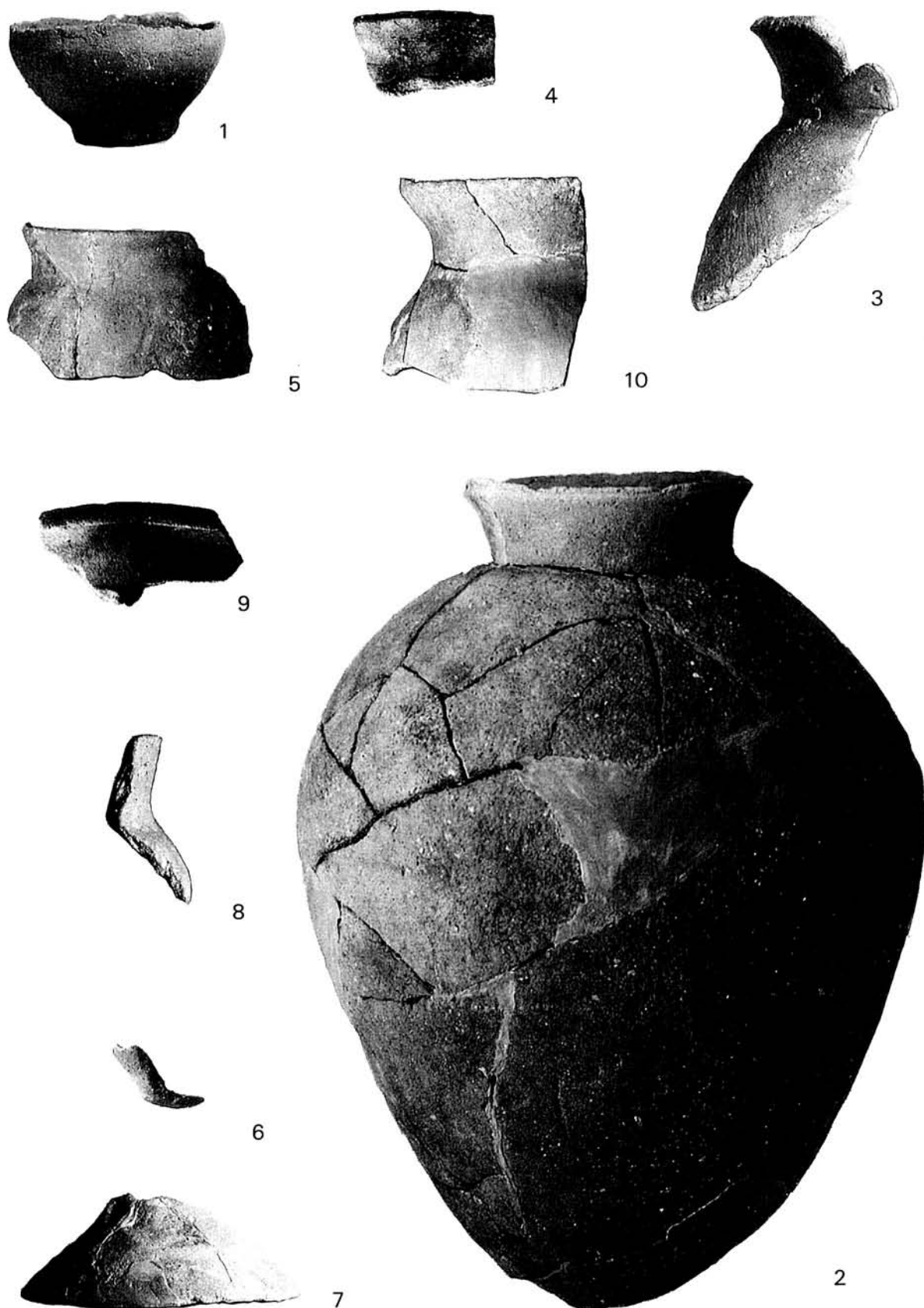
b. 第 3 号土壤

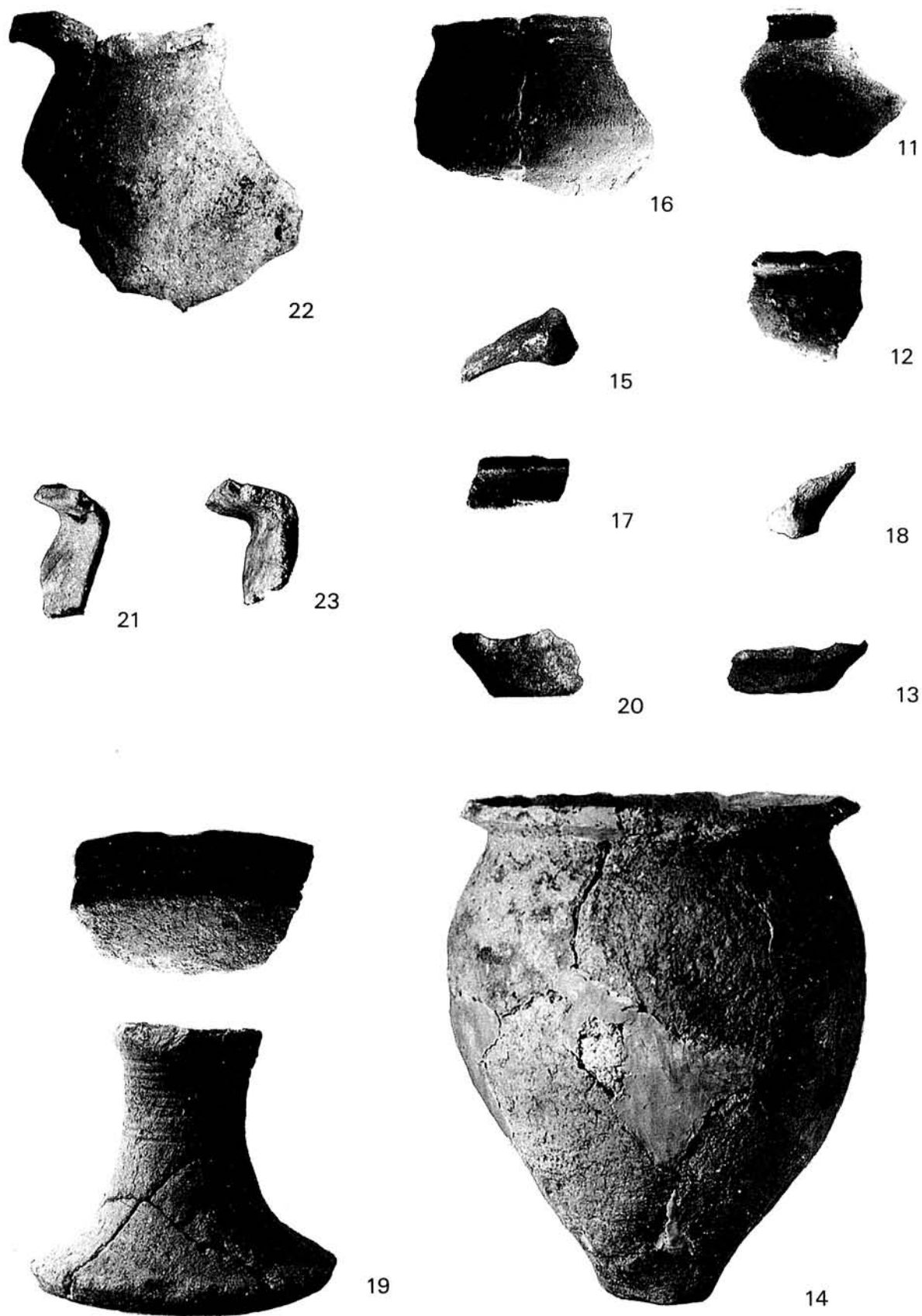


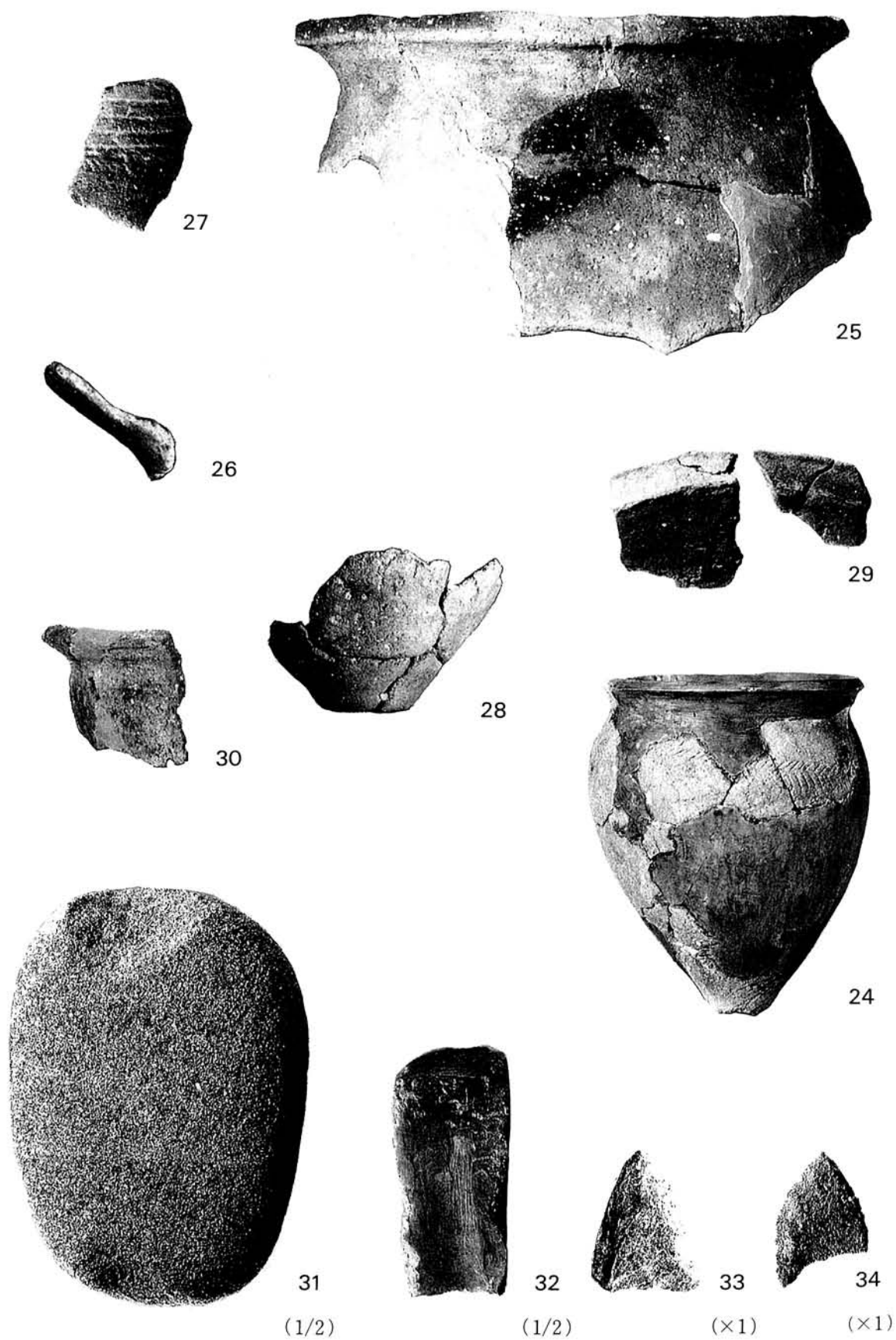
a. 第4号土墳



b. 掘り込み状遺構遺物出土状況







(財) 広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第13集

広島市東区牛田早稲田所在

牛田早稲田遺跡発掘調査報告

1994年2月

編集行 財団法人 広島市歴史科学教育事業団

広島市中区国泰寺町一丁目4番15号

TEL (082) 248-0427

印刷 電子印刷株式会社

広島市中区堺町一丁目1番5号